

宮島の歴史と民俗

HISTORY AND FOLKLORE OF MIYAJIMA

NO. 2

1983

宮島町立宮島歴史民俗資料館

MIYAJIMA MUNICIPAL HISTORY AND FOLKLORE MUSEUM

目 次

○はじめに	1
○宮島町玉御池出土の中世土器	是光吉基 2
○近世の宮島の山林をめぐる人々の動き	佃 雅文 9
○資料紹介—宮島芝居関係資料(2)—	高橋修三 18
○資料館の活動	42
1、入館者数	42
2、年度別予算一覧	44
3、資料収集	45
4、調査・研究	49
5、展示・普及	50
6、歴史民俗資料館協議会	56
7、施設の整備	57
8、購入図書・受贈交換図書	58
○町史のあゆみ	63
1、日誌	63
2、委員会など	68
○編集後記	72

はじめに

昭和49年4月に開館して以来9年が経過しました。毎年のことながら今年度もここ信仰の地宮島・観光の地宮島にふさわしい資料館のあるべき姿を求めて日々努力してまいりました。

おかげさまで町民の方々からは自分たちの資料館という親しみを持たれ、多大のご支援をいただいております。地域の中に育つ資料館として職員一同感謝しています。今後ますます当資料館が発展していくため、町民の方々のより一層のご支援を期待し、精進してまいりたいと思っております。

当宮島へは年間二百数十万という観光の来島者があります。歴史の地宮島の姿を求めて全国各地から来られます。生涯のうち数えるほどしか来島の機会のないこれら観光客へ真の宮島の生い立ちを知っていただき、将来へ向けて種々精進を重ねている現在の宮島を見ていただくのも資料館の大きな使命かと思っています。

町民の方へ、多数の来島者のために、ひいては次代の町民に残すものとして、真の宮島の生い立ちを理解していただける資料館作りへと願いを込め、資料の収集・調査研究・普及活動・保存等と現在諸々の課題を抱えながらわずかな職員で取り組んでいます。しかしながらその成果も資料館専属の学芸員1名という現状では活動に限界があり、遠大な資料館の使命達成へは遅々とした歩みしかつづけざるを得ません。

行政機構に対する現在の社会状況には厳しいものがあります。職員増員を早急に図ることは容易なことではないでしょう。しかし、資料館のなすべき使命を思うとき増員できるまで活動は遅々としたものでよいというわけにはまいりません。そこで、昨年度より巾広く関係分野との連携を持ち、より深めた調査研究をめざしていくことを願い、町史編さん室の専門員2名と協力し、町史編さん室と資料館とが一体となって調査研究・普及活動等に取り組んでまいりました。

従って、年報も昨年度より改題して資料館と町史編さん室合同のものとししました。内容構成も巾広くして研究紀要的要素も充実してきたつもりです。

ここに改題後の第2号を発刊して、この1年間のささやかな活動の一端をお届けしたいと思えます。当資料館充実発展のため忌憚のないご批判やご指導がいただければ幸いです。

最後になりましたが、宮島の調査研究をつづけておられる元県教育委員会指導主事で現在県立廿日市高等学校教諭の是光吉基先生から、本号のために貴重な寄稿をいただきました。誌上を借り厚くお礼申し上げます。

宮島町玉御池出土の中世土器

廿日市高校教諭 是 光 吉 基

1. はじめに

宮島町内における考古学的調査は皆無に近い状況にあるといっても過言ではないであろう。

本町内で最初に報告された遺跡としては、1825（文政8）年刊行の『芸藩通志』にみえる貝殻塚であろう。本書によれば、大江浦の浜辺から13町の石窟内に貝殻があり、弘治年中の厳島合戦の際、陶方の残兵が居住していたものと推測している。そしてこの遺跡については1903（明治36）年、生田百齋氏の『修学旅行地図』にも記載があり、さらに1959（昭和34）年、酒詰伸男氏の大著、『日本貝塚地名表』には大江浦洞窟内貝塚として所収された。また、1960（昭和35）年から63（昭和38）年にかけて全国でおこなわれた埋蔵文化財包蔵地の分布調査では、かんがら塚として確認され、土鍋等が出土したことを報告している。

1941（昭和16）年、松浦隆三郎氏は『吉備考古』第49号誌上に次のような報文をよせられた。「かつて新聞紙上に厳島山上に貝塚ありと報ぜられたが自分は調査せしことなし。ただし厳島の戦い当時のものにはあらず。それ以外にもある由である」。そして、この記述にもとづいて『日本貝塚地名表』には厳島山上貝塚として収められた。しかし、本貝塚については現在未確認であるので、早急に明らかにする必要があるだろう。

1962（昭和37）年、今田三哲氏は「廿日市周辺の先史・古代遺跡の概観」（『廿日市の文化』第1集）に当町の遺跡としてたたら渦遺跡をとりあげられた。本遺跡は、戦後の開拓中に土器が出土したことから明らかになったもので縄文時代後期初頭に位置づけられる縄文土器片、また、弥生時代中期に比定される土器、あるいは石器などが出土しており、非常に重要視される遺跡である。なお、周辺地には師楽式土器を包含する場所が存在しているといわれており、今後の確認がのぞまれる。

その後、当町内の遺跡についての報告はほとんどなく、わずかに全国の埋蔵文化財包蔵地分布調査の成果を記した『全国遺跡地図（広島県）』（1967）に、前記したかんがら塚、たたら渦遺跡、また、要害山城跡、経尾経塚、大江遺跡、青海苔遺跡の6遺跡が収録された。

要害山城跡（宮尾城跡）は1555（弘治元）年に築かれ、厳島合戦の際、毛利方の重要な拠点となった山城であるが、現状では大きく変貌しているために往時の様相を窺うことができない。

経尾経塚からは12世紀に比定される白磁印花牡丹文合子、和鏡、甕が出土している。

大江遺跡は土器の散布地であるが所属時期については不明である。

青海苔遺跡ではかなり多量の須恵器が出土しているようで、当町の古墳時代の様相を明らかにしていくうえで注目される遺跡である。

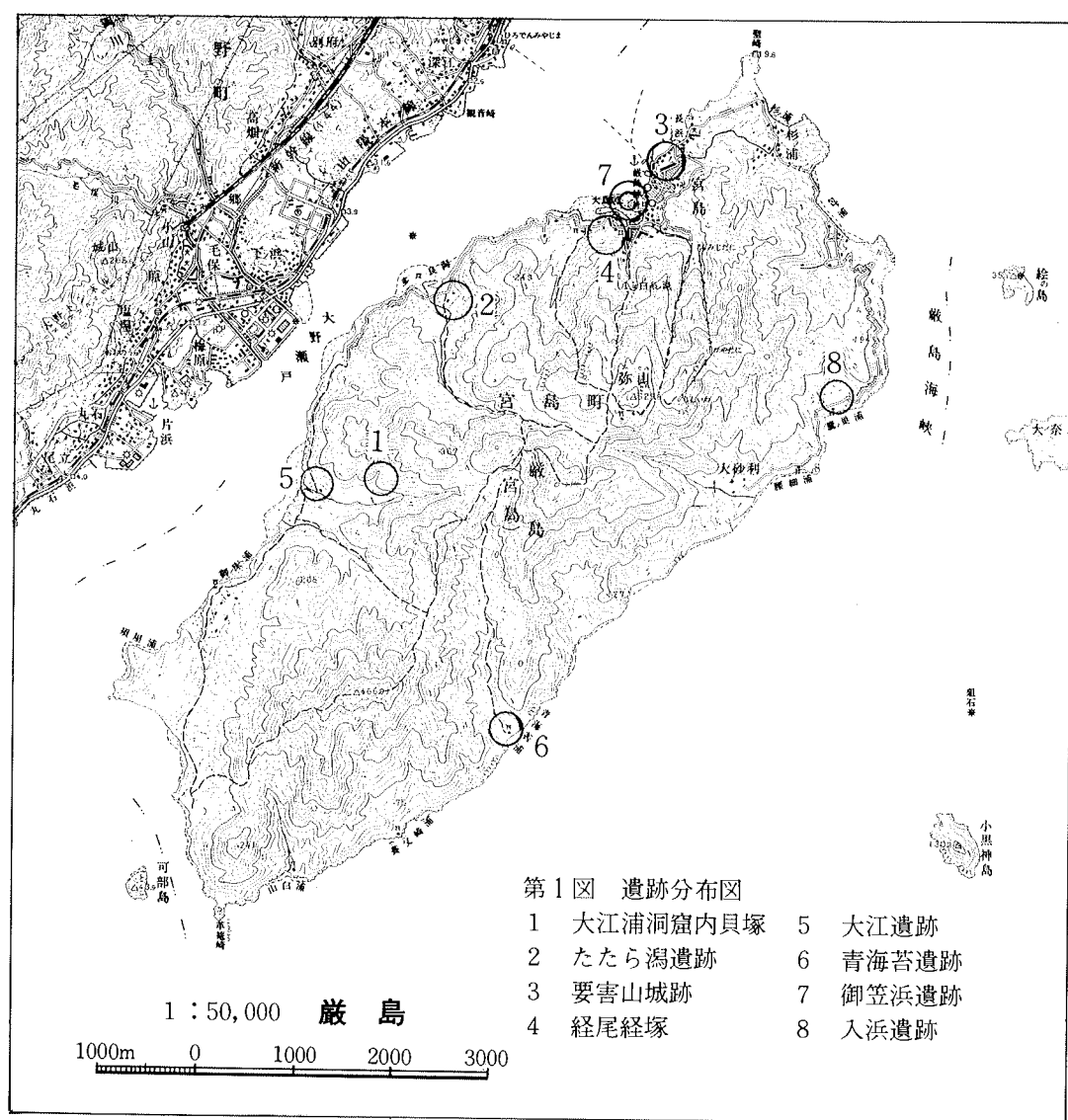
これ以後、新たに確認できた遺跡としては、1978（昭和53）年、御笠浜の下水道工事中に土師質

土器が出土した御笠浜遺跡、1981（昭和56）年、当町の坂谷幸一郎君によって磨製石斧が採集された入浜遺跡など数ヶ所の遺跡が明らかになった。

このように遺跡数が十数例と当町で少ない状態は、本島が特別名勝、特別史跡の指定という強い規制によって保護されていることが開発を抑制し、遺跡の発見が容易でない状況を物語っているといえよう。しかし、遺跡の分布状態からみて開発が行なわれている地域で詳細な分布調査を実施するならばさらに遺跡数は増加するであろう。

さて、ここに紹介する土器は1983（昭和58）年8月玉御池において採集したもので、その出土地の性格と中世の土器という点などから注目できるものであるところからここに報告を行なっておきたい。

出土遺物については、現在町史編さん室で保管されていることを一言付記しておく。



2. 出土遺物

遺跡は巖島神社の本殿と大鳥居の間の玉御池で、遺物は干潮時に御笠浜と西松原に通ずる通路の西寄りにもっとも多く散布している。

採集された遺物はいずれも小破片になっているために器形を窺い知れるものはわずかである。

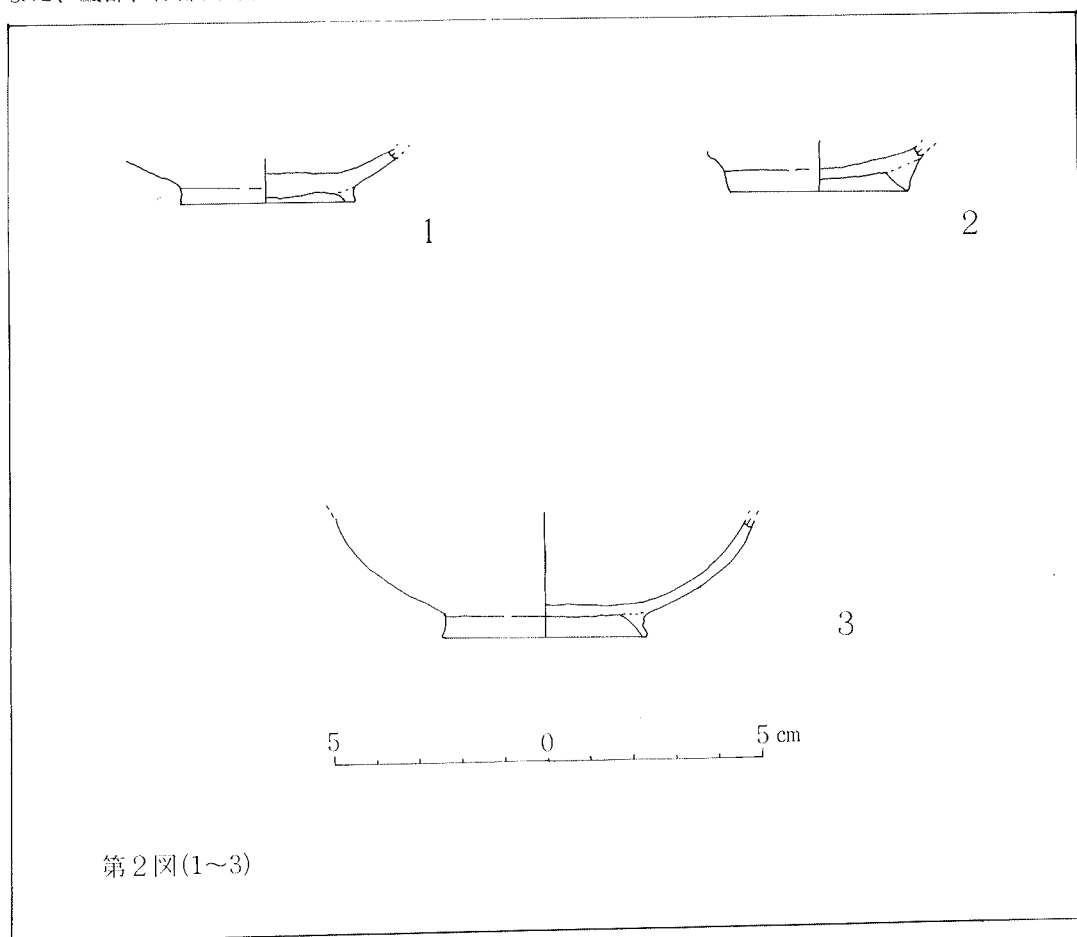
土師質土器

いずれも小破片のため全器形を窺えるものはない。器種としては椀・杯・土鍋・こね鉢である。

椀は、底部を凹ませているもの(A)、丸底に高台をつけたもの(B)、底部が平高台のもの(C)、平高台の内面を削って付高台状にしたもの(D)に分けられる。

椀A(写真. 1)底部、内面とも丁寧なナデ調整が行なわれており、底部を指で押しあげている。焼成良好で黄白色を呈し、細砂粒を含む。

椀B(第2図1～3)、(1)、(2)は三角形の高台をつけた丸底で、高台部分は粘土紐を貼りつけ両側から指頭で整形している土器(1)と両側からヨコナデで調整している(2)がある。底部の内外面は丁寧なナデ調整がおこなわれており、焼成良好で黄白色をしている。(3)は、丸底に台形状の高台をつけたもので、この部分は粘土紐を貼りつけた後に両面からヨコナデの調整を行なっている。また、底部、体部内外面とも丁寧なナデで調整され、焼成良好で黄白色を呈す。



椀C(第2図4・5)高台部が比較的厚いもの(4)とやや薄い土器(5)とがある。前者は内外面とも摩滅が著しいために調整等は不明である。焼成はやや不良で、暗褐色を呈し小砂粒を含む。後者の底部には糸切り痕が認められ、高台から体部にかかる部分はへらでおさえている。そして、体部内面はヨコナデ調整が行なわれている。焼成は良好で黄褐色を呈し、かなりの量の砂粒を含んでいる。

椀D(6)高台はへらで削り出しているために不整円形をしている。内面はへらによる切り取りがなされており、左回りで行なわれたことが明瞭である。

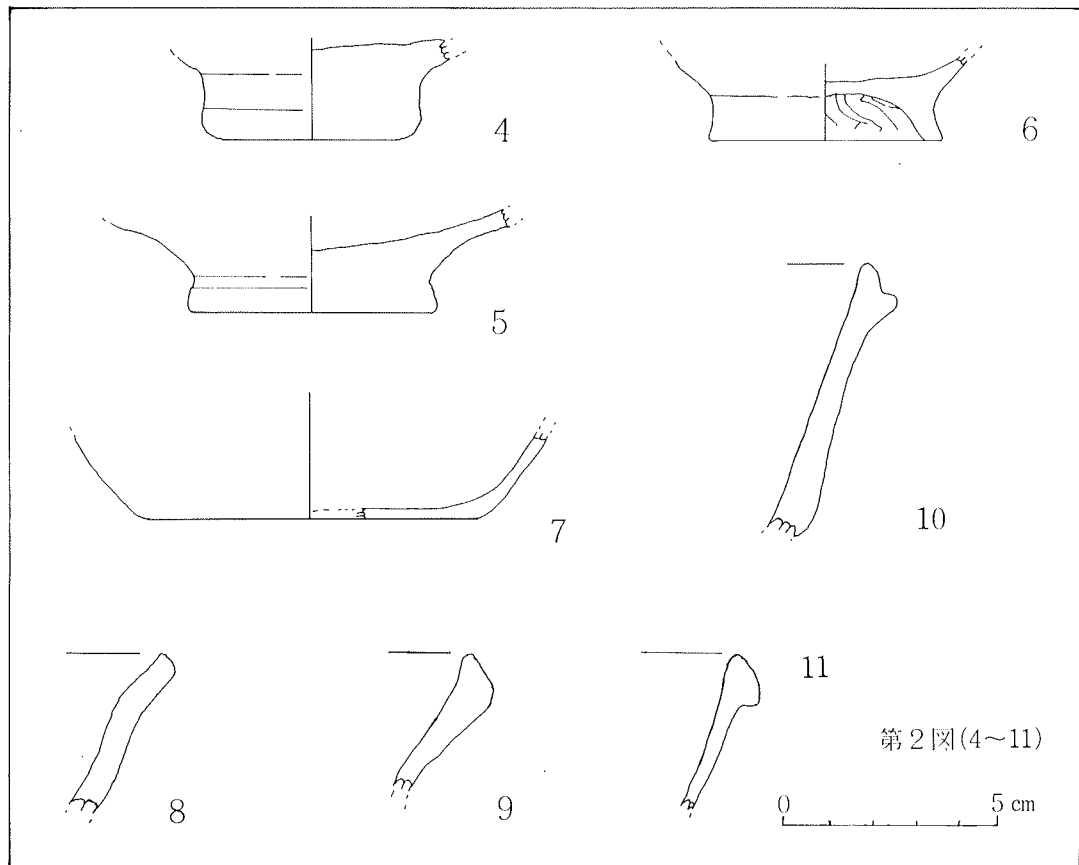
杯(7)底部はへら切りで体部内外面ともヨコナデ調整が行なわれている。焼成良好で黄白色を呈している。

土鍋は、口縁を外反させ、端部をやや内湾させるもの(A)、口縁端部近くにつばを付けたもの(C)とに分けられる。

土鍋A(8・9)、体部内面はヨコナデ調整が行なわれ、外面はススが顕著に付着する。(9)は口縁端部をやや肥厚する。

土鍋B(10)体部は直線的に立ちあがり、口縁部外面に台形状をするつばをつける。つばより下位にはすすの付着が認められ、胎土に多くの細砂粒を含んでいる。

こね鉢(11)口縁端部を肥厚させ、体部内面にはヨコハケ目がある。焼成良好で外面は炭素を吸収させる。



陶器と思われる土器がある。

備前焼(12)壺で口縁部はほぼ垂直に立上がり気味で端部を肥厚さす。肩部には波状文がある。

亀山焼(13・14)近年、格子の叩目を有する土器の生産地が各地で明らかにされているために明確に亀山焼と断言することはできないが、一応ここでは亀山焼と称しておきたい。(13)は肩部でやや厚みをもっている。いずれも焼成堅ちで青灰色を呈している。

磁器碗(15)、小破片のため器高等不明である。素地は淡灰色で淡灰緑色の釉がかかり、中国産の青磁である。

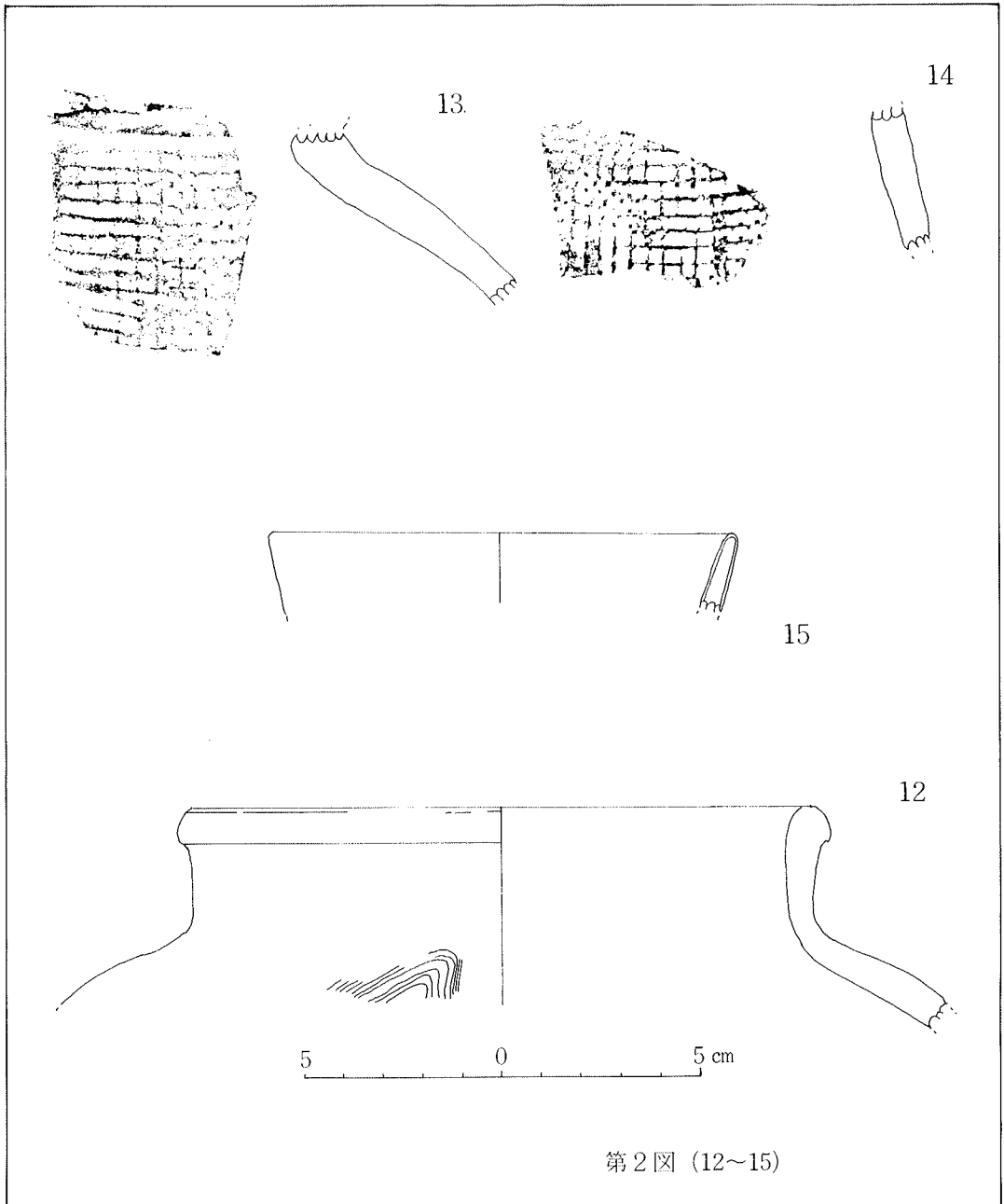




写真1. 土師質土器



写真3. 土師質土器

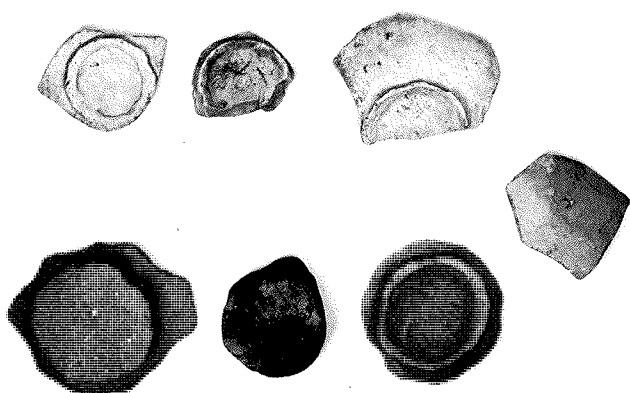


写真2. 土師質土器

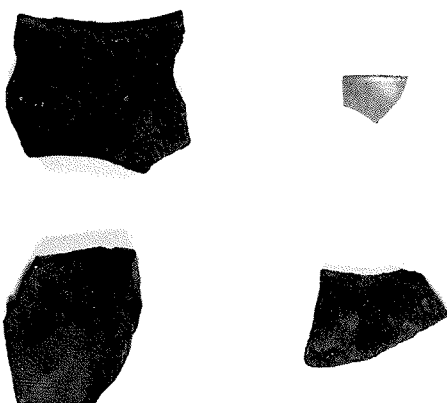


写真4. 陶磁器

3. おわりに

以上、出土遺物について簡単に説明してきたがこれらから派生する問題について若干考えてみたい。

まず、出土遺物の所属時期についてであるが、いずれも小破片となっているために詳らかにするには困難である。ただ、本遺跡から出土した土師質土器碗A、碗Bは福山市草戸千軒町遺跡、尾道市街地遺跡などから出土する土器と非常に酷似し、これらの地域から移入された可能性も考えられる土器である。この土器は、草戸千軒町遺跡の土師質土器編年のⅡ期に該当しており、13世紀後半から15世紀後半頃の年代が与えられ、ほぼ同時期に比定できる。また、備前焼や亀山焼はその時代の特徴をよく示している。一方、土師質土器碗Cはこれよりも後出する時期と考えられ、御笠浜遺跡出土の土師質土器と同様であり、16世紀代の年代に位置づけられよう。

このようにみてくると本遺跡から出土した土器の大多数は鎌倉時代後半から室町時代中葉に比定することができるであろう。

次に、出土地と遺物との関係について検討を加えてみよう。出土地はすでに前記したように玉御池であり、厳島神社の境内地にあたっている。ところでこの地から出土した遺物をみてるならば、土鍋等日常什器がかなりの量をしめていることに注目しておかなければならないであろう。もし、大多数の土器が神事に際して使用され、その後にこの場所へ破棄されたものであるとするならばさして大きな問題はないであろう。しかしながら神事に使用される土器は碗・杯・皿形態のものがほとんどで、日常什器の破片が非常に多く採集できる状況では、そのような性格を考えるにはやや躊躇せざるを得ないであろう。かかる点からすると市井の人々によって使用された什器とするのがもっとも妥当であると思われる。そこで次に注意されるのは、出土地が居住地であったか否かということになるであろう。当然、現状では潮の直接の影響を受ける地であり、居住するには困難である。また、往時においても現在と同様の温暖な時期で、ほぼ同状態であったと考えられており（桑代勲氏「草戸千軒町遺跡付近の沖積平野の形成」『草戸千軒町遺跡一遺跡編一』1965）、不適地であったことが窺われる。このような点から考えてみるならば、採集された土器は西方の大西町付近から流入したり、遺棄された可能性が非常に強く想定されるのであり、該地付近に町屋の形成があったことを考慮する必要があるであろう。

かかる点から今後建物等の建て替えが行なわれる場合には事前に発掘調査を実施し、当時の様相をより具体的に把握しなければならないであろう。すでに広島県下では尾道市、福山市鞆町の市街地では発掘調査が行なわれ、かなりの成果をあげており、当町でも早急に実施されることが望まれる。

なお本文中の挿図・図版は、町史編さん室の佃雅文氏の手をわずらわせた。記して謝意を表した。

近世の宮島の山林をめぐる人々の動き

宮島町史編さん室 佃 雅 文

1. はじめに

昭和55年度より、町史編さん事業が緒について、現在まで町内外の関係資料の収集をすすめているが、従来から宮島の歴史の古さは多く説かれながらも、江戸時代以降の史料残存の乏しさが指摘されている。

文書史料は、神社、寺を中心に残っている反面、町内の人々の動きを示す史料が少ない。このことは、宮島に関する歴史的研究の領域が、自ずと古代、中世を中心とすることに反映しているといえるだろう。

そのため、ここでは、歴史民俗資料館所蔵の宮本家文書「安永元年御触状并諸事控」（以下「諸事控」と称す）を中心として、宮島の山林に関する記録を取り出して紹介する。

この「諸事控」は、表紙の年記は、安永元年であるが、記録者である宮本屋栄蔵が、天明5年（1785）11月に、西町月行事役に任命されてから、宮本屋柳助の手になる文政6年（1823）頃までの記述が詳細である。記録されている記事の内容については、かなり精疎が激しく、判読不明のところもあるが、現在のところ、西町の町方史料としては唯一まとまった形態を残しているものである。そのため丹念にその内容を読み込むことによって、近世後期における宮島の様相（山林、富の開催、市立の様子、来島者など）が、幾分なりとも判明するものと考えている。

2. 近世以降の管理体制

宮島の面積30.20km²のうち、山林原野は29.5km²で全体の98%を占めている。そのほとんどが国有林であり、林野庁広島営林署の管轄下にある。

その管理体制を遡ってみよう。

寛永7年（1630）11月、広島藩主浅野長晟の郡中法度にはつぎのように記されている。

「(第9条) 宮嶋之薪所にてたき候外者、広嶋、上方にて売買不仕様に可申付事。」(『広島県史近世資料編Ⅲ』、自得公済美録巻21)

そして宮島の山林は、「御建山」として藩の山方役人の管理下におかれることになった。(後藤陽一氏「歴史環境」『厳島民俗資料緊急調査報告書』1972、広島県) 以後、明治4年（1870）の廃藩置県まで、基本的にはこの体制が続いたものとみられる。廃藩置県以後は、広島県の所管となるが、明治17年（1884）には農商務省の直轄となっている。(『森林経営と保全に関する基礎調査報告』1972、P188)

ところで、県下の山林は明治18年（1885）に農商務省の直轄となるが、それに先立って宮島の山

林がこのような措置をうけたのには何らかの理由があるのかもしれない。しかし、厳島神社氏子総代の請願により、明治19年（1886）には、神社の委託林とされた。この間の事情については、現在のところ不明であるが、明治国家の体制整備の渦のなかに、宮島も取り込まれていたことを窺うことができる。

明治14年（1881）段階の官林規模は、松、樟、354,883本、面積2,446町5,827であった。（『広島県治山50年史』）

明治30年（1897）4月、森林法が公布され、大正9年（1920）2月には大部分が保管林に、10月保安林編入がおこなわれ、伐採が禁止された。

昭和4年（1930）、弥山頂上から大元公園にいたる地域が、天然記念物「弥山原始林」の指定を受け、保護されることになる。

戦後昭和26年（1951）風致保安林2,383ha 昭和27年（1952）全島が特別史跡及特別名勝の指定を受け、法律的な保護、管理体制の下におかれ現在にいたっている。

ここにみてきたように、法的規制が敷かれる背景には、山林の過度の利用による荒廃が甚しくなったことが推察できる。例えば、明治30年の森林法以前は、山子が300人にも達し、木の伐採が激しかった。あるいは、戦時中、松根油採取、その他の利用で山が荒れた。という古老の話を耳にすることができるからである。

また大正15年9月12日の災害、昭和20年9月17日枕崎台風の災害なども山林の荒廃による土石流が原因とされている。

このように宮島の山林は、伐採と保護、規制をくり返しつづ今に至っているが、今や白砂青松の瀬戸内海の象徴は、マツクイムシ等による松枯れを生じ、危機に瀕しているのではなからうか。

3. 近世の山林利用

寛永7年の郡中法度以後、また藩有林御建山として、宮島の山林はその利用が制限されてきた。

郡中法度によれば、薪（松大束か）は、島内利用のみ認められていたが、その薪を広島、上方方面へ売買することが禁止されている。

寛永10年（1633）11月、山の木を伐り、薪として販売した者が処罰された。ある者は入牢を命ぜられ、またある者は、両手の小指を切りおとされた。そして宮島の薪船として38艘に焼印を押し、登録することが命じられた。（『広島県史近世資料編Ⅲ』P50～51）何故に藩は、このような厳罰主義でのぞむ必要があったのだろうか。その理由のひとつとして、明暦元年（1655）から徴収された厳島薪税がある。

この薪に対する税が、藩の財源のなかでどのくらいの位置をしめていたのかは不明であるが、何らかのメリットがあったにちがいない。あるいは藩権力の力を示すが故の厳罰主義であるのかもしれない。それはともかくとして、税を徴収されるだけの生産量であったことは確かであり、そのことは浅野氏入部以前の段階において、宮島の山林から伐り出される薪が、かなりの範囲に流通していたとは考えられないだろうか。そのことが寛永7年の法度にみられる広島、上方への私的な売買を禁ずる条文として出てきたように思われる。このことは単に薪だけにかぎらず、物質的、精神的

な面での「宮島」を藩権力がいかに取り扱うかの過程を示すものではないだろうか。享保8年(1723)、東西町内の者たちの傷害事件が発展し、社法と藩法との対立にまで及んだが、このことから、そのように思えてならない。

話を山林に戻すと、享保9年正月、宮島奉行の勤向きに対して述べられた覚の第7条には、「一、山林、竹木猥に不伐採様堅可申付候、社堂廻り之樹木不荒様可見計事」(『広島県史近世資料編Ⅲ』P482)とある。このような職務内容を命ぜられてはいるが、現在、宮島奉行が島に常駐していたか不明の点が多い。島内の行政事務その他を担当した役人の全貌は明らかにし得ないが、以下で山林管理に関係したと思われる役人についてみてみよう。

4. 山林管理の役人

吉田弘氏所蔵の「宮島諸役人被仰付年月覚帖」は、寛政11年(1799)2月に記され以後いくつかの書き足しのみられる記録である。島内の各々役職の任命、解任の年月日が記されている。そこに記された役職はつぎのとおりである。山林関係としては、山方山守役・木請取役・小木座木請取役・木守役がある。

町年寄役	入津ヶ所算用役
三家手代役	小木座木請取役
目代役	木守役
社倉頭取役	筆役
山方山守役	肝煎役
年番月行司役	入津会社手代
唐物改役	組頭
入津ヶ所元ノ役	西町町役
木請取役	
町役	

あくまで前記史料の記述からそれぞれの役職の構成などについてみよう。

①山方山守役

構成は3～4人程度、頭取役の初出は寛政9年(1797)である。給銀は、安政6年(1859)、2人扶持、年に銀300匁、ほかに銀5枚、燭代15匁となっている。室浜木請取役、長浜木請取役を兼帯する者もいる。

山守の職務内容については、具体的には記していないが、天保4年(1833)「御用留」(吉田弘氏所蔵)に興味深い記録がある。

新町和泉屋武助は、自分抱の遊女が病気になったため、療養のため大坂へ差登させることにした。その代りとして新たな遊女の引き受けの願を組頭宛に提出した。この組頭は奥書を記し、山方に提出している。

また内容によっては、山方が再度調査の上、町年寄3人に提出している。

この記録にみるかぎり、当事者一組頭一山方山守役一町年寄という差し出し経路を描くことができる。明治5年(1872)9月23日、「山守事務不及取扱候事」として廃止された。

②木請取役

多いときは5人。小木座、大東、長浜、室浜の別があり、小木座頭取、木守頭取の兼帯者がいる。

明治4年(1871)10月7日、三木場所廃止となり、入津会社係りとされる。明治5年(1872)9月21日、「長浜両木場處取繕ひニ相成、并ニ室浜木場所御廃止之事、勿論伐末并室浜番人共御廃止」とある。これにある「三木場所」は、「両木場所」のうち長浜以外の場所については、現在のところ比定できない。

③小木座木請取役

この役職は、「諸事控」によれば寛政3年10月20日の条に西御場所に設置したとある。

職務内容については不明であるが、1～2名おかれ、安政4年(1857)12月30日に廃止されている。

④木守役

給与をみると安政期2人扶持、一カ年銀150匁である。木守役に任ぜられた者には前職が室浜・長浜・網浦の番人の者がいる。この番人は山林管理のためと思われ、前記三木場所とはこの室浜・長浜・網浦に相当するのかもしれない。また明治5年(1872)9月23日廃止されるが、この時木守役は11人であった。

このように末だ十分にその内容を把握できない状態であるが、今後吉田弘氏所蔵史料の検討などにより山林利用の具体的な動き、入津会社などについても明らかになるであろう。

5. 「諸事控」にみる災害

ここで宮本家文書の「諸事控」から山林に関する災害、とくに山火事に関する記録を抜き出したのが、第1表であり、大まかな発生位置を示したものが第1図である。

第1表 宮島における災害

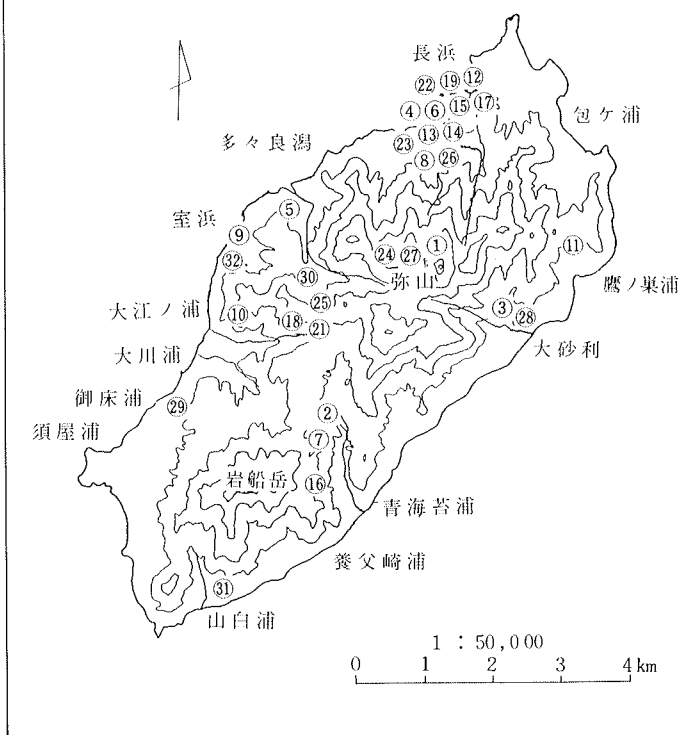
No.	西暦	年月日 (旧暦)	場 所	備 考
1	1750	寛延3.9.2	弥山浦々	鬼風
2	1757	宝暦7.	青海苔浦	山火事
4	1776	安永5.7.7	大鳥居	落雷
3	1767	明和4.	大砂利	山火事
5	1784	天明4.	多々良瀨	山火事
6	1786	天明6.11.23	市	火事
7	1787	天明7.2.17~19	青海苔浦~須屋浦・御床浦	山火事
8	1788	天明8.5.29	滝町	山崩
9	1789	寛政元.5.8	室浜	山火事
10	1789	寛政元.9.27	大江	山火事

No.	西暦	年月日（旧暦）	場 所	備 考
11	1790	寛政 2 . 4 . 18～19	東浦居浜～山白浜～明神浜	山火事
12	1791	寛政 3 . 9 . 26	長浜	山火事
13	1791	寛政 3 . 10 . 9	本社	火事
14	1798	寛政10 . 2 . 5	光明院	火事
15	1800	寛政12 . 2 . 27	光明院	火事
16	1800	寛政12.閏 4 . 14	養父崎～青海苔浦・大江越	山火事
17	1802	享和 2 . 9 . 晦	新町	火事
18	1802	享和 2 . 10 . 2～4	藤川東奥～大江・こしかが み・石ほうけ	山火事
19	1803	享和 3 . 4 . 4	魚棚薬師	火事
20	1807	文化 4 . 2 . 24		大風
21	1807	文化 4 . 2 . 晦	藤川～大江越・こしかがみ・ 石ほうけ	山火事
22	1810	文化 7 . 6 . 13	小浦	火事
23	1812	文化 9 . 4 . 3	華藏院	火事
24	1813	文化10 . 5 . 14	大師堂	落雷
25	1815	文化12 . 8 . 3～4	大江越～室浜	山火事
26	1815	文化12 . 9 . 9	中江町	火事
27	1818	文化15 . 1 . 6	弥山～大砂利・奥ノ院	山火事
28	1830	天保元 . 2 . 25～28	大砂利	山火事
29	1830	天保元 . 7 . 24～晦	御床浦～大江	山火事
30	1832	天保 3 . 8 . 2～5	室浜～多々良潟・三つ丸子	山火事
31	1833	天保 4 . 8 . 2	山白浜	山火事
32	1833	天保 4 . 8 . 18	室浜	山火事

「諸事控」に初出する宮島の災害は、寛延3年(1750)の「鬼風」である。これにより「弥山浦々之大木数万之痛」という損害を被った。以後天保4年(1833)の室浜の火事まで32回の災害について記録されている。その内訳は山火事18回、町内などの火事10回、山崩れ1回、大風2回である。

ところで、第1図から山火事発生時所についてみよう。分布状態から島内は大きく4つに分けられる。すなわち、市街地付近、室浜～大江、青海苔浦付近、大砂利付近である。これらの火事発生の原因に関する記録はないが、瀬戸内海地域、宮島の気候状態も考え合わせると自然発火よりも人の手の加わった失火の可能性が強いので

第1図 災害発生の分布



はなかろうか。とすれば、前にみたように室浜に木場所が設置されていたことなどから、その付近にはかなりの人が入っていたと思われる。室浜付近で8回の山火事が発生していることなどから山利用とのつながりが考えられるだろう。同様に青海苔、大砂利付近でも4回、3回という山火事が発生している。この付近における山林伐採あるいは人の出入りに関する記録はないが、室浜と同じように考えられないだろうか。

では以下に少し冗長ではあるが、各々の災害を紹介しておこう。

7 天明7年2月17日、朝5つ時(午前8時)から19日夕方まで青海苔より出火し須屋、御床周辺を焼く。

この火事では、4月15日に、「能美島、井ノ口、地御前、東崎、大野、玖波、小方、木野、由宇美、音戸、阿多々島、大竹」方面へ三家手代をはじめ町役らがあいさつに出向いている。

8 天明8年5月29日、卯ノ上刻(午前5時)に起きた山崩れは、瀧宮社、龍燈院を破壊し、菩提院の北側も被害をうけた。

9 寛政元年5月8日、申ノ上刻(午後4時)室浜の奥から燃え出した山火事は、10日の朝まで続き、大江越までを焼きつくした。そのため9日夜に広島から役人が出張り、島奉行が病気のため浜奉行の井上彦三郎が立会っている。原因は不明であるが、同所の「土取場」から出火した。

11 寛政2年4月18日昼8つ時(午後2時)東浦居浜(現在地は不明)から出た火は、山白浜、鷹ノ巣、包ヶ浦、明神浜を蔽い、大砂利との境までを焼き、19日7つ時(午後5時)、折りからの

雨によって鎮火した。この時も広島から役人と島奉行が出張っている。

16 寛政12年閏4月14日昼8時(午後2時)、養父崎より出火し、青海苔、大江越を焼き、雨によって15日朝4時(午前10時)に鎮火した。

17 享和2年9月30日、新町槌屋の風呂部屋が全焼する。

18 享和2年10月2日、昼7時(午後4時)藤川東奥から出火、大江、こしかがみ、石ほうけ周辺を焼き、4日夜に鎮火した。

20 文化4年2月24日、大風は巖島神社の社殿、棚守家、西方院、多門坊^(ツツミ)の屋根に被害を与えた。

21 文化4年2月晦日、昼から暮6時(午後6時)にかけて、藤川原、大江越を焼いた。18と同じ範囲を5年後に再び焼失した。

25 文化12年8月3日昼より4日昼8時まで大江越から室浜に至る約1里四方を焼く。

26 文化12年9月9日、中江町抱の薪から出火する。

27 文化15年正月6日夜7時(午前4時)より弥山の老母桜付近から出火。大砂利付近4～5町、奥ノ院周辺を焼く。

28 天保元年2月25日夜から28日まで大砂利にて山火事発生。27日夜から降り出した大雨にて鎮火する。

29 天保3年7月24日朝、御床浦神社の裏より浜伝いに大江付近へと延焼する。これにより御番組3組が出動。晦日8時過からの大雨にて鎮火する。

30 天保3年8月2日、室浜奥から再び出火し大火となる。多々良潟、三つ丸子辺に拡がり、4日7時頃から雨が降り出したが5日には惣町中の者が未火消に動員される。

31 天保4年8月2日朝7時頃(午前4時)山白浜の奥より出火。3日7時頃には御詰所を引き払う。

6. 利用をめぐる規制について

宮島の山林利用をめぐる規制、処罰などについては、すでに寛永7年の郡中法度、寛永10年の書付でみてきたが、「諸事控」の記録をみてみよう。

山の利用に際しては「山方札」、「抹香札」の配布がおこなわれた。

〔史料1〕

一、山方札

右四町共町内木守方より請取候様相成申候。

右山方札持参致候へはたとへ御町廻り中見附られ候とき山札差出し相済候事。

但し、小内木之儀は無間々相成不申事。

寛政4年(1792)3月頃の記録である。この山方札を請取った者が山へ入りどのような伐採をおこなっていたのだろうか。また但書にあらわれた「小内木」に関する記録については意味が不明である。

〔史料2〕

一、御奉行所弥山道薪木^ホ巖敷被仰付、榊ニ至迄法度並抹香取御弾ニ付抹香札持主之銘々。

座主、^(イナヘ)多門坊、棚守、竹林、大願寺、菩提院、東照宮

寛政3年(1791)5月頃、弥山道付近の薪木伐採、抹香採取の規制が弛緩したとして出されたものである。

〔史料3〕

一、二日夜、山中へ薪ひろい行候共なた斧堅無用、かま持参致事。

これは文化2年(1805)12月2日、盗伐をした者が発見され閉門の処罰を受けた記録と共に出されたものである。なた、斧により伐採できる大きさの本枝について取り締りが行なわれていることがわかる。すなわち鎌程度の伐採のみが認められていた。

どのような管理体制を敷こうとも、そこには必ず抜け道あるいは目の届き得ないところが生ずるのが世の常であり、管理する側、される側の葛藤が歴史を形づくっているのではなかろうか。

つぎに表面にあらわれた盗伐者に関する記録を示しておこう。

〔史料4〕

一、当八月下旬比、私共藪ニ而盗伐仕候趣盗賊共方申上候付、伐取レ候覚有之候哉、全林竹藪ニ而も盗伐候義有之候ハ、其砌申出ホ茂仕置可申筈ニ候旨被仰付奉畏候、私共藪竹五六本宛盗レ申候義相違無御座候、尤藪番人与申義も無御座候付、折々見廻り仕候處、九月上旬ニ見当り申候付、八月下旬盗取レ候と奉存候、前々方三本五本伐取レ候故いろいろ聞しらへも仕候得共、相しれ不申全射盗難ニ逢ひ候へハ人名も相知れ不申候而も一應御届も可申上筈ニ御座候旨其心付無御座奉恐入御尋ニ付此段申上候、以上。

(享和元年)
西十月

松屋弥兵衛

宮本屋栄藏

山本丈助様

野田次助様

この記録の前後の経緯については解からないが、盗伐者の口から藪竹の盗伐が洩れ、届を出していなかった町内の役人が奉行所役人に提出した詫状ともいえる。藪竹の盗伐にまで神経をとがらす奉行所側と、「藪番人与申儀も無御座候」と述べる町内役人との間に興味深いものが感じられないだろうか。

また、御建山内での抜木売買者についてはその詮義は一層厳しくなっている。

〔史料5〕

一、十二月十六日、^(寛政4年)□□□□□半蔵与申者当御山所抜木ヲ買取扱趣相聞ニ付、町廻り方山方相しらへニ被遣候處、弥相違之儀も無之、然所半蔵義行方相知不申、出郡方も相しらへ有之趣相聞へ依之当所之者半蔵居所存候者有之候ハ、早速申出候様相触候、若し然隠し置於後日相顕而ハ隠主御咎可被仰付ニ付、此段不洩様可被相触候、已上。

文化10年(1813)11月4日、弥山仁王門付近から薪を伐り出した者が、籠舎の処分を受けている。

このようにみえてくると、記録上の制約はあるが、寛政以後に記録が多いように思われる。この時期は島の経済が不況に陥った時期でもあり、富会の増会願などもみられる。また寛政3年(1791)には奉行所から、大東入札払いを唯一の生計の支えとすることなく、「手細工、思付々々心かけ夫迄

産業ニ致可申」と産業の振興をはかるよう書付が出されている。無断入山者の摘発とこれらとの間には何らかの関連がありそうにも思える。

藩側も、寛政3年10月7日には御山所背木の詮義で弥山番の忤を処分し、寛政5年（1793）4月6日には、小木座山子中の願事一件で閉門を申し付けている。また文化13年（1816）には神社の廻廊に海水が上るほどの大風が起きた時、小木座の材木が流された。この責任を問われて小木座役2人が閉門となりその後職を解かれている。

以上のような記録がみられるが、これらは歴史という時の流れのなかであらわれた氷山の一角にすぎない。狭いとはいえ、島の山の中では人の目の届かない多くのところがある。その部分において記録にとどめられない人の動きのあることが、予想される。

7. 結びにかえて

以上、宮本家文書を中心に宮島の山林をめぐる記録を紹介してきたが、今後とも史料的発掘を続けていく上でもっと多くのことが解明されるだろう。

例えば、明治期の山林利用、その搬出、流通に関与したと思える入津会社の実態、近世において山を利用してきた人々が、その後どのような生活を余儀されなくなっていったのか。そして現在にどのようにつながっているのかなど、残された問題は多い。

それはともかくとして、山林のほかにこの「諸事控」には富会、市の様子などが断片的ではあるが記録されているので、今後何らかの形で紹介できればと思う。

資料紹介—宮島芝居関係資料(2)—

宮島歴史民俗資料館学芸員 高 橋 修 三

前回、『宮島の歴史と民俗』No.1では、宮島芝居に関する資料のうち、歌舞伎番付を紹介したが、今回は、歌舞伎及びそれ以外の芝居関係資料を収録しておく。目録は、資料の種類・内容に応じて、便宜的にAとBとに分類した。

記載事項について、A・B共通のそれを資料名、寸法、製作年代、備考とした。その他の項目は、Aについては、前回とほぼ同様であるが、異なる点は、狂言作者の項を省略したこと、座本と頭取・太夫元の項を一括したこと。また、座本・太夫元の項には、収録資料に記されていないものもあるが、番付等から判明したものはこれを掲げた。Bでは、製作者の項を設けたが、これには編著者、絵師・彫師、版元・発行者の順で優先的に1名のみを掲げ、複数の場合は、それを備考欄に記した。なお、備考欄に複製とあるのは、東京都在住山下中氏の所蔵資料、(注)を付した資料は写真等を目録の後に掲載した。この中で、欠損、墨の薄れなどにより文字が判読し難い箇所には□を付しておいた。

A

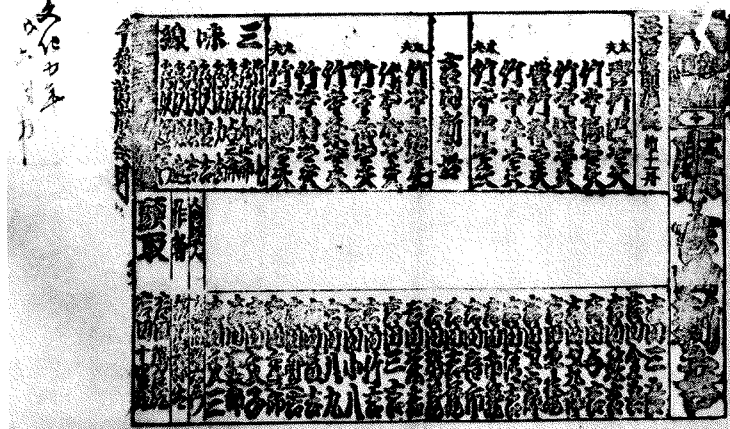
資料名	寸法	製作年代	芸能	座元・太夫元	役者	備考
触込番付	34.5×46.7	(文化5年6月)	浄瑠璃	吉田新吾	竹本中太夫 豊竹巴太夫	「文化五辰」「宮島六月市芝居番付」の墨書 (注1)
奉納額	79.8×106.1	文政3年6月	歌舞伎	中村吉三郎	市川団藏 嵐富三郎	左の縁に「文政三辰歳六月吉日大坂道頓堀本平敬白」(注2)
口上絵番付	33.0×47.7	(文政3年6月)	籠細工	一田正七		墨刷り
奉納額	80.6×104.7	文政5年6月	歌舞伎	浅尾亀藏	市川市藏 沢村国太郎	右の縁に「奉懸御宝前大坂道頓堀本平友七」、左の縁に「時干文政五年星六月吉祥日」 (注3)
芝居絵	25.8×24.5	(文政13年)	歌舞伎	中村梅吉	中村歌右衛門	春江亭北英画、浪花井伝板、色刷り (注4)
芝居絵	25.8×24.7	"	"	"	中村松江	" (注4)
奉納額	88.5×42.0	天保6年	歌舞伎	中村梅吉	市川海老藏	広島世並屋伊兵衛板 (注5)
役割番付	24.7×34.3	(弘化元年)6月	仕形物真似	中村屋馬佑	嵐屋実藏 瀬川屋あかし	外題「布引」、「娘景清」
奉納額	62.6×90.8	弘化3年6月	歌舞伎	中村梅吉	嵐三幸 中村松江	右の縁に「弘化三年丙午六月吉日」、左の縁に「太夫元本平」 (注6)

資料名	寸法	製作年代	芸能	座元・太夫元	役者	備考
口上錦絵 触込番付	37.3×52.3 31.0×43.1	(嘉永6年6月) (安政5年)3月	歌舞伎 小児芝居	浅井房之助 中村翫八	市川海老藏 嵐橘太郎 三樹梅丸	広貞画 (注7) 「坂田屋文右衛門」の 墨書 3点
口上錦絵 触込番付	34.9×47.5 23.6×32.3	(万延元年6月) (元治元年3月)	歌舞伎 浄瑠璃	中村翫八	坂東亀藏 藤川友吉 竹本春太夫 竹本亀太夫	芳滝画、複製 (注8) 「元治元年子三月廿八 日」の墨書、外題「伊 賀こへ」、「おそめ久松 油屋」など
口上錦絵	37.0×50.0 22.2×15.7 (張出し)	(慶応元年6月)	歌舞伎	中村翫八	中村雀右衛門 荻野扇女	貞広画、張出しに中村 宗十郎の口上、複製 (注9)
口上錦絵	38.0×51.1	慶応2年6月	歌舞伎	中村翫八	嵐雛助 嵐富三郎	田中芳春画、裏面付箋 に「慶應二丙寅宮渡有 故遂不開場」、複製 (注10)
口上錦絵	37.0×52.0	(慶応3年6月)	歌舞伎	中村翫八	中村雀右衛門 沢村国太郎	田中芳春画、複製 (注11)
口上錦絵	36.5×54.0	(明治元年)6月	歌舞伎	中村翫八	三樹大五郎 嵐大三郎	田中芳春画、複製 (注12)
口上錦絵	38.3×26.3	(明治元年6月)	歌舞伎	中村翫八	尾上多見藏	裏面付箋に「慶應四戊 辰宮渡補役」、複製 (注13)
奉納額	67.7×108. 8	明治元年6月	歌舞伎	中村翫八	中村翫雀 中村七賀助	右の縁に「慶応戊四」、 左の縁に「辰六月市座 中敬白」
口上錦絵	38.0×51.5	(明治2年)6月	歌舞伎	中村翫八	嵐雛助 市川筆之助	田中芳春画、複製 (注14)
口上錦絵	36.7×51.0	(明治3年)6月	歌舞伎	中村翫八	尾上多見藏 おぎ野扇女	貞広画、複製 (注15)
奉納額	70.5×100. 2	大正7年5月	歌舞伎	成駒屋	中村鴈十郎 片岡我左エ門	右の縁に「大正七年」、 左の縁に「戊午五月吉 日 世話人 綿井五良 吉 中村新十郎」、清水 名雄吉筆 (清水賞七門 弟) (注16)
奉納額	70.8×100. 7	大正9年6月	歌舞伎	若嶋座渡会栄 吉	中村玉六 嵐信藏	右の縁に「大正九年」、 左の縁に「庚申六月吉 日 世話人 綿井五良吉 榎木松太郎 田中常次 郎」 (注17)
絵番付	35.5×48.4	午6月	生人形			墨刷り

資 料 名	寸 法	製作年代	製 作 者	備 考
安芸国厳島勝景図并記事	30.3×506.0	(享保16年) (記事は元禄2年)	貝原益軒 (著)	木版色刷り、折本 (注18)
安芸厳島御神社之図	29.9×46.9	文化14年	宮島浜之町 船津屋源吉 (版)	木版、墨刷り (注19)
版木(安芸厳島御神社之図)	28.2×47.5	"	"	(注20)
安芸厳島御社の図	27.7×43.0	文政5年	宮島本町 楊枝屋十蔵(版)	木版、墨刷り
安芸厳島神社図	34.0×46.5	天保5年	岳亭一磨 (画)	木版、墨刷り
厳島社頭図	26.2×37.3	嘉永元年	宮島廻廊見世 竹原屋忠八 郎	木版、色刷り
安芸厳島御神社図	33.6×46.7	嘉永7年	宮島金鳥居横 船津屋岩吉 (版)	木版、色刷り
厳島社頭之図	31.5×47.4	慶応2年	宮島幸町 船津屋岩吉(版)	木版、色刷り (注21)
"	31.5×47.0	"	"	木版、墨刷り
厳島弥山細見之図	51.5×73.6	(江戸後期)	平安 有楽斎長秀 (画)	木版、墨刷り
版木(厳島弥山細見之図)	49.5×70.3	"	"	
芸藩伊都岐島神社	28.4×45.0	(江戸後期)	中西 幸太	木版、墨刷り
厳島社頭之図	33.4×46.5	(江戸後期)	宮島 仙岳 (版)	木版、色刷り、2点
厳島社頭之図	34.5×46.5	明治4年		木版、色刷り (注22)
版木(厳島社頭之図)	41.0×54.0	"		片面は防州岩国錦帯 橋図
大日本安芸国厳島神社全景	24.5×35.4	明治21年	宮島 藤山文助 (発)	単色刷り (注23)
大日本安芸国厳島社之略図	31.5×48.8	明治27年	広島市 森光治郎 (著・発)	多色刷り
大日本三景之一安芸国厳島 之図	24.7×68.4	明治28年3月	広島市 野田峯太郎(著・発)	多色刷り (注24)
日本三景之一厳島神社之図	35.2×50.6	明治28年5月	大阪市 鈴木常松 (発)	単色刷り (注25)
宮島花柳界とみくじ界晩秋 地図 (慶応二年記憶地図)	24.2×33.0	(明治)		手書き

資 料 名	寸 法	製作年代	製 作 者	備 考
巖島道芝記	24.2×16.0	元禄15年	小島常也（著）	木版、冊子本、7巻8冊、書林 京三条小佐治与三衛門他（注26）
巖島絵馬鑑	25.9×18.4	天保3年	千歳園藤彦（編）	木版、冊子本、5巻5冊 渡辺対岳縮図、書林 江戸日本橋 須原屋茂兵衛他（注26）
芸州巖島図会	25.6×18.0	天保13年	岡田清（編著）	木版、冊子本、10巻10冊 山野俊峯斎画、書肆 広島世並屋伊兵衛他（注26）
俳優三十六花撰	14.5×10.5	明治3年	小春園	墨書、冊子本、13丁、尾上多見藏、中村雀右衛門など「文久三年六月宮島芝居ニテ見シヨリ明治二年五月京都ノ芝居ニテ見シ迄ノ」有名な俳優36人の扮名を詳記したもの。上記芝居の他に、京南、大阪筑後、浄国寺芝居も含む。複製（注27）
撮要記事拔萃	14.7×21.0	安政2年～明治25年	山下豊穂	撮要記事は、山下豊穂（宮島奉行山下平八郎の嗣子）が自らの日記を要約したもの（全4編）。山下中氏（山下平八郎の曾孫）が、更にこれより抜萃して作成。第2編（慶応元年～明治7年）を欠く。56ページ、複製
三都大芝居物役者大見立改名家号俳優細吟 浜芝居 宮芝居	35.0×56.0	慶応3年	八文舎自笑	木版、墨刷り、大坂和田正兵衛筆、同綿屋喜兵衛板（注28）

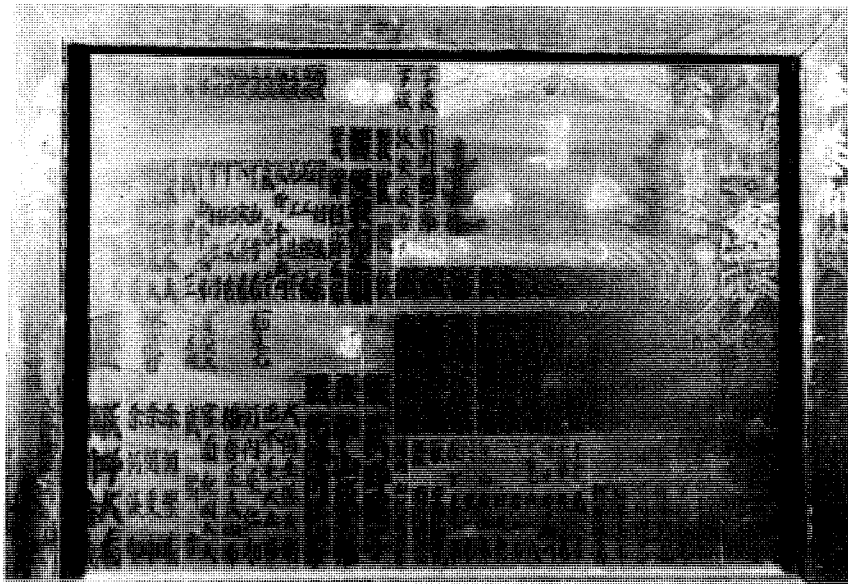
明治廿年

[illegible]

	線 味 三			夫太			夫太			夫太			夫太				座 本 吉 田 新 吾
	鶴 沢 伊 右 門 鶴 沢 勇 造 鶴 沢 熊 吉 鶴 沢 宮 吉 鶴 沢 力 泰 鶴 沢 与 三 郎 鶴 沢 卯 四 郎 竹 沢 宋 七	竹 本 綱 太 夫 竹 本 村 太 夫 竹 本 久 米 太 夫 竹 本 千 代 太 夫 竹 本 武 太 夫 文太夫事 竹 本 土 佐 太 夫	吉 田 新 吾	竹 本 中 太 夫 竹 本 八 十 太 夫 豐 竹 都 太 夫 竹 本 此 舟 太 夫 竹 本 塚 太 夫 豐 竹 巴 太 夫	玉 沢 五 郎 旭 五 続 一 冊												
頭 取 吉 田 十 四 藏	作 者 佐 太	人 形 細 工 人 吉 田 右 工 門	吉 田 文 三 吉 田 大 五 吉 田 重 三 吉 田 卯 吉 吉 田 藤 九 吉 田 八 八 吉 田 小 吉 吉 田 竹 吉 吉 田 三 吉 吉 田 榮 吉 吉 田 勢 藏 吉 田 吉 藏 吉 田 音 市 吉 田 清 太 吉 田 文 郎 吉 田 平 九 吉 田 与 吉 吉 田 熊 吉 吉 田 金 吾 吉 田 三 吾														

「文化五辰
宮嶋六月市芝居番付」(墨書)
[宮嶋] 芝居にて

(注) 2



奉懸御宝前

座本 中村吉三郎

一太夫 中村梅太郎

一立役 中山他之助

一長歌 中村富五郎

一立役 嵐市藏

一三味線 中村長三郎

一立役 谷村徳松

一三味線 谷村新造

一立役 片岡清徳

一三味線 中村由三郎

一立役 坂東八尾

一鳴もの 中村嘉市郎

一立役 中村貫藏

一建道具元 万村吉

一立役 市川三河藏

一建道具元 幾右衛門

一立役 市川熊五郎

一建道具元 幾右衛門

一立役 市川虎藏

一建道具元 幾右衛門

一立役 市川富三郎

一建道具元 幾右衛門

一立役 市川團七郎

一建道具元 幾右衛門

一立役 坂東友吉

一建道具元 幾右衛門

一立役 市川團七郎

一建道具元 幾右衛門

一立役 坂東友吉

一建道具元 幾右衛門

一立役 市川團七郎

一建道具元 幾右衛門

一立役 坂東友吉

一建道具元 幾右衛門

一立役 市川團七郎

一建道具元 幾右衛門

一立役 坂東友吉

一建道具元 幾右衛門

応時 文政三辰歳六月吉日

大坂道頓堀

本平白敬

— 24 —

(注) 4



(注) 5



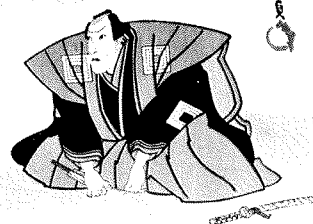


月 日

市川海老蔵

市川海老蔵の御座候處御當所不相変益御繁栄祝賀大慶至極二奉存候隨而私義
先年御當地江罷出御ひいき御恵ミニ預り候段冥加至極難有仕合奉存候
且其御禮今一度御目見へ致し度と日比ねんずる成田不動尊猶嚴鳴靈
神を朝夕いのりし甲斐有て縁二路引路次屋の招きは神の引合せと
思えバほんに當地江足手のばして寝る事はほんのことじやが御ひいき
といふ言の葉はねた間もわすれは致し升ぬ猶靈場名國をしたひ道
引門弟の九歳改名市川團藏其外一座召連有がたき御目見へ出勤と心
立浪こぎ出シ播磨湯月も出入御見物山々つもの喜びのよハひも寿海此
度が是が一世一代と思へバ名残おし鳥つがもないとの捨てりふ聞かきかんは
名國の御君達の恵ミにて寄縁を爰二白猿の幾久しくも限りなふますく
御餘光御ヒイキをねがひ掛幕寿を祝す初日の評判を只あさからず
永當の御見物御入來之程偏二奉希上候 已上

市川海老蔵



藝 品

宮 寫に
おるて

寿海老人白猿

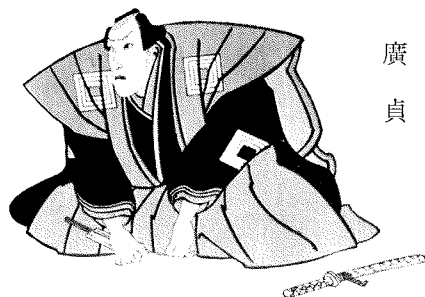
御 蟲 扇の

にしいつくしま
いつくしミこれて
二度目の猿か
三升

三升

乍 憚 口 上

廣 貞



季夏之砌二御座候處御當所不相変益御繁栄祝賀大慶至極二奉存候隨而私義
先年御當地江罷出御ひいき御恵ミニ預り候段冥加至極難有仕合奉存候
且其御禮今一度御目見へ致し度と日比ねんずる成田不動尊猶嚴鳴靈
神を朝夕いのりし甲斐有て縁二路引路次屋の招きは神の引合せと
思えバほんに當地江足手のばして寝る事はほんのことじやが御ひいき
といふ言の葉はねた間もわすれは致し升ぬ猶靈場名國をしたひ道
引門弟の九歳改名市川團藏其外一座召連有がたき御目見へ出勤と心
立浪こぎ出シ播磨湯月も出入御見物山々つもの喜びのよハひも寿海此
度が是が一世一代と思へバ名残おし鳥つがもないとの捨てりふ聞かきかんは
名國の御君達の恵ミにて寄縁を爰二白猿の幾久しくも限りなふますく
御餘光御ヒイキをねがひ掛幕寿を祝す初日の評判を只あさからず
永當の御見物御入來之程偏二奉希上候 已上

一世一代

月 日

市川海老蔵



乍憚口演

甚暑之砌二御座候所御當所益御繁栄
 祝賀大慶ニ奉存候隨而私義先年御當所江
 罷出御目見へ仕殊之外御恵ニ預り候段冥加
 至極難有仕合ニ奉存候然ル所其後江戸表へ
 罷下り未熟之悴に名前相續いたさせ右悴
 同道ニ御禮旁今一應御目見へ仕度与明暮
 嚴嶋明神をねんじ奉りしかひ有て一昨
 昨年大坂表合兩人共御召寄ニ預りはからずも
 明神之御引合せにや此度御當所江
 御招キ預り候段未熟不調法之若者
 彦三郎始メ中村雀右工門藤川友吉
 大谷友松其外一座同道ニ御目見へ
 出勤と心も急く播磨湯月も出入御見物
 別而御名国之諸君子ニ一座御尊顔を
 拝し奉る段冥加ニ餘りいか斗大慶
 至極ニ奉存候猶悴彦三郎義
 いまだ若年之義ニ候得者中々御當所之
 御目がねニ相叶ひ候義及絶候得ども
 何分弱きを助る御當所之御氣風ニ
 取すがり幾久しく御ヒイキ御取立之
 御余光ニ預り度何卒初日合永當く
 御来駕之程偏ニ奉希上候 以上



里の家
 芳瀧画

かのえ
 申の季夏

坂東亀藏
 坂東彦三郎
 一座中

とにかくにたらぬ力や印地打
 御虫貞を頭にうける暑かな
 薪水
 楽善



乍 恐 口 上

園 廣 画

嚴嶋御祭事二付當年も
不相變御興行御座候二付浪花
若手花方座御召下シ被仰付候所
廣嶋御旦那樣方申に不及
豫弔當下筋御旦那樣
是迄種々取替引替
御見物被為遊候跡へ若もの共のミ
罷出自然藝事不行屈之義
御座候 而者 御旦那樣方之御思召も
如何と案勞罷在候隨 而私共
昨年も御目通り仕り
御品肩を蒙り又候
當年も推參仕候 而者 御機嫌も
如何と奉存候得共先師
歌右工門を初メ故人に相成候者共
藝道御委敷候間不行屈キ
有之候 而者 一世名折と呉々も
教道仕候二付御叱りも不顧す兩人
種々と御願ひ推參仕若者共後見仕候 而
新外廻取組奉入御覽二度何卒初日合
賑々しく御光臨御品肩とり立之
程偏二奉希上候 已上



嬉しさの身にあまりけり夏の東風
御品肩の手風にあふつ扇子かな

雀右工門
扇女

私義兼 而當年
御目通り相願申上度
志願候處泉弔へ罷
越し留主中御治定を
承り取ものもとりあへず
罷歸推參仕候何卒
御取立之程ひとへに
奉希上候 已上

中村宗十郎

(注)10



演説

甚暑之砌二御座候得共

御旦那樣方益御機嫌能被遊御座

恐悅至極二奉存候隨而私共一同此度

御當處宮嶋芝居へ罷越中国

遠近之御旦那樣方へ御目見仕候段

冥加至極難有仕合奉存候乍併當

御地ハ例年芝居興行被致候二付浪華

二も名ある役者年々罷越候間格別二

御目篇も弘き中国筋之御見物樣方へ

未熟不練之私共所詮御意二可入樣ハ

無之候得共浪華之役者二中国修行

不仕候ハ役者数二も加わらす候樣申二付実以

朋友之手前も名聞あしく何卒一卜たひ

御當所へ罷越度存罷在候折柄右座並之

者共御招二預一同大慶至極奉存候

右御礼として一座申合種々御目新き

狂言指出精仕奉入御覽候間被仰合

賑々敷御見物二御光来之程偏奉希候

以上

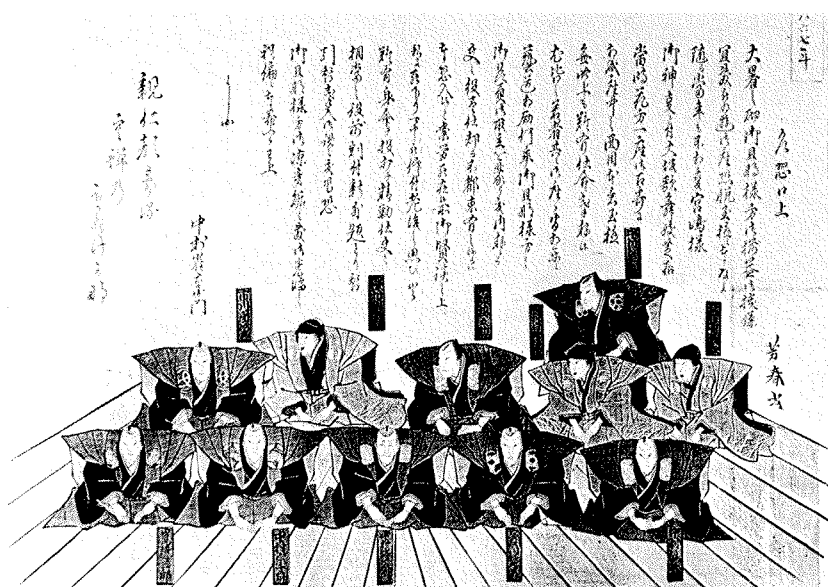
慶応寅六月

座本
惣一座



田中

芳春



乍
恐
口
上

芳春画

大暑之砌御曰那樣方御揃益御機嫌

沢村寿美之丞

宜敷被為遊御座恐悅至極二奉存候

隨^面當年も不相變宮嶋様

御神事二付大坂歌舞妓芝居

當時花方座御召寄に

相成座中之面目本意至極

中村翫八

無此上也難有仕合二奉存候

尤皆々若者共二御座候間相互二

藝道相勵何卒御旦那様方之

御蟲屑御取立を蒙り度内存二

夫々役員仕却し不都束有之候し

奉恐入候と案勞罷在候所御賢談之上

私に罷下り可申被仰付老後之思ひ出

難有身命ヲ投打チ精勤仕夫々

相當之役前割付新外題とり替

引替奉入御覽度乍恐

御旦那樣方御涼旁賑々敷御光臨之

程偏二奉希上候
已上

月
日

親仁顔する

空蟬の

もぬけかな

中村雀右衛門

中村梅之助

嵐富三郎

沢村國太郎

市川團次郎

中村翫雀

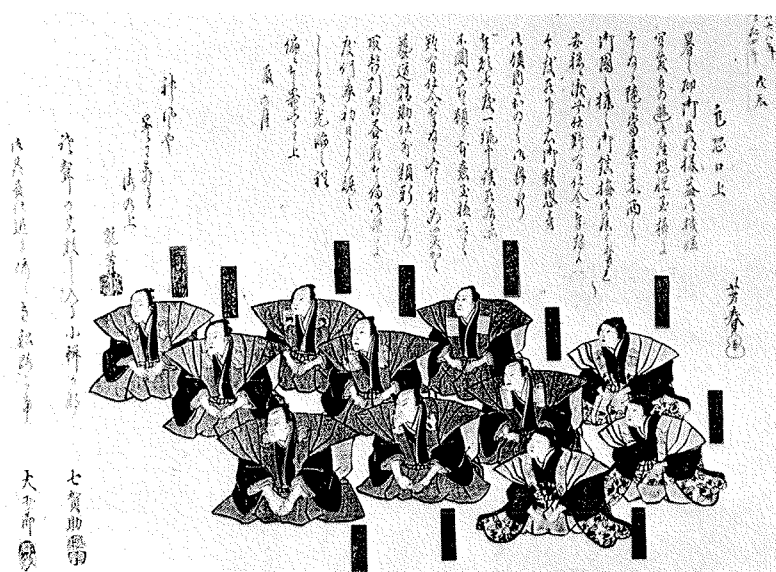
實川延若

中村雀右衛門

中村宗十郎

嵐徳三郎

(注12)



暑之砌御旦那樣益御機嫌
宜敷被為遊御座恐悅至極に
奉存候隨面當春已來西之
御國々様之御鎮撫御蔭二面私共迄
安穩ニ渡世仕難有仕合に奉存候
今度罷下り右御報恩旁
御領内におゐて御興行
奉願上度一統申談罷居候所
不凶御召ニ預り本意至極重々
難有仕合ニ奉存候右ニ付為冥加之
藝道精勤仕外題新もの
取替引替昼夜奉備御覽に
度何卒初日より賑々
しく御光臨之程
偏ニ奉希上候 已上
辰 六月

乍恐口上

芳春



神風や

暑わする々

海の上

翫雀

我聲の其数に入る小蟬かな

七賀助

御蟲屑の追手涼しき船路かな

大五郎

六十年

乍憚口上

一大暑御座候處先以て
御座候方益御機嫌克被為遊
御座恐悦至極之御義二奉存候隨
此度三樹大五郎并一座取揃へ御目見へ
仕候処俄二大五郎義病氣差発り只今之
姿二 御神事之間似合不申
乍去代り役者 年々多人數
御召抱御興行之御当所故御目古るく
当惑仕候折柄私へ久々ニ 出勤仕右御詫
之申訳仕候様被仰付如何計難有仕合ニ
奉存候何がな御毎ニまかせ新狂言工夫
取仕組奉入御覽候間不相替御虫履之
余光を以て初日分永當く御見物
御来船之程偏ニ奉希上候 已上

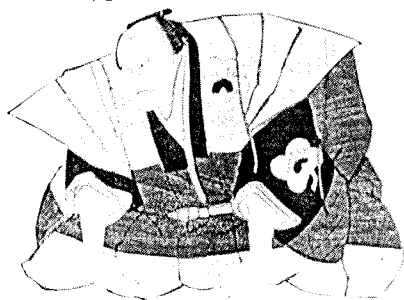
尾上多見藏

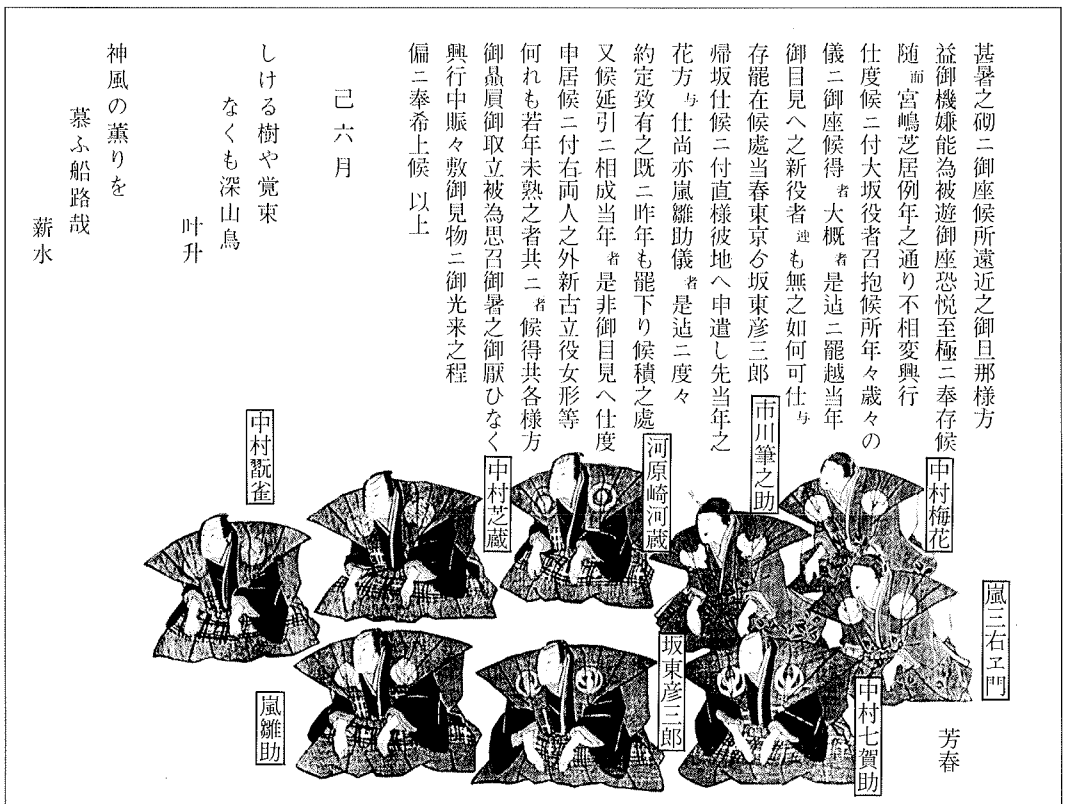
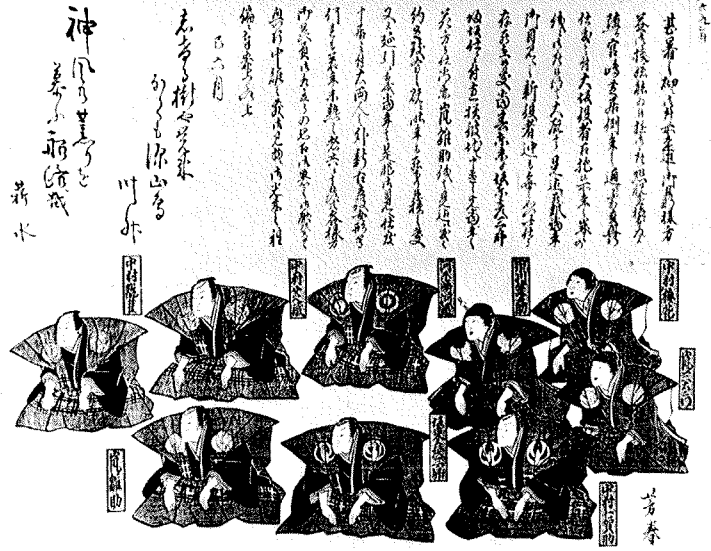


乍憚口上

一大暑之砌二御座候處先以て
御旦那様方益御機嫌克被為遊
御座恐悦至極之御義二奉存候隨
此度三樹大五郎并一座取揃へ御目見へ
仕候処俄二大五郎義病氣差発り只今之
姿二 御神事之間似合不申
乍去代り役者 年々多人數
御召抱御興行之御当所故御目古るく
当惑仕候折柄私へ久々ニ 出勤仕右御詫
之申訳仕候様被仰付如何計難有仕合ニ
奉存候何がな御毎ニまかせ新狂言工夫
取仕組奉入御覽候間不相替御虫履之
余光を以て初日分永當く御見物
御来船之程偏ニ奉希上候 已上

兼ル 尾上多見藏





大暑の砌二御座候所遠近之御旦那樣方
益御勇健ニ被為遊御座恐悅至極ニ奉賀候
然者當宮嶋芝居義例年之通不相變興
行仕候ニ付大坂役者年々歳々御目見へ
仕候義ニ新役者無之思召之程も
如何存候折柄一昨年罷下候尾上多見藏義
兼今一度御目見得仕先達御ヒイキ
御執立ニ相成候御禮且御当地一世一代
迄ニ出勤仕度様申候ニ付右之外是迄御引立ニ
相成候未熟不調法之者共打寄興行
仕候間何卒御蟲貞御引立被思召暑中
之無御厭被仰合賑敷昼夜之御わかちなく
永當御見物之程偏ニ奉希上候以上

十二月

神風の恵も嬉し

船あそび

松玉



神風の恵ミも嬉し

船あそび

松玉

午六月

大暑の砌二御座候所遠近之御旦那樣方
益御勇健ニ被為遊御座恐悅至極ニ奉賀候
然者當宮嶋芝居義例年之通不相變興
行仕候ニ付大坂役者年々歳々御目見へ
仕候義ニ新役者無之思召之程も
如何存候折柄一昨年罷下候尾上多見藏義
兼今一度御目見得仕先達御ヒイキ
御執立ニ相成候御禮且御当地一世一代
迄ニ出勤仕度様申候ニ付右之外是迄御引立ニ
相成候未熟不調法之者共打寄興行
仕候間何卒御蟲貞御引立被思召暑中
之無御厭被仰合賑敷昼夜之御わかちなく
永當御見物之程偏ニ奉希上候以上

中村駒之助

貞廣画

中村梅花

片岡松太郎

尾上多見藏

風璃寛

風吉三郎

おぎ野扇女

中村雀右衛門



[illegible]

(注)17



納 奉 念 紀

大正九年

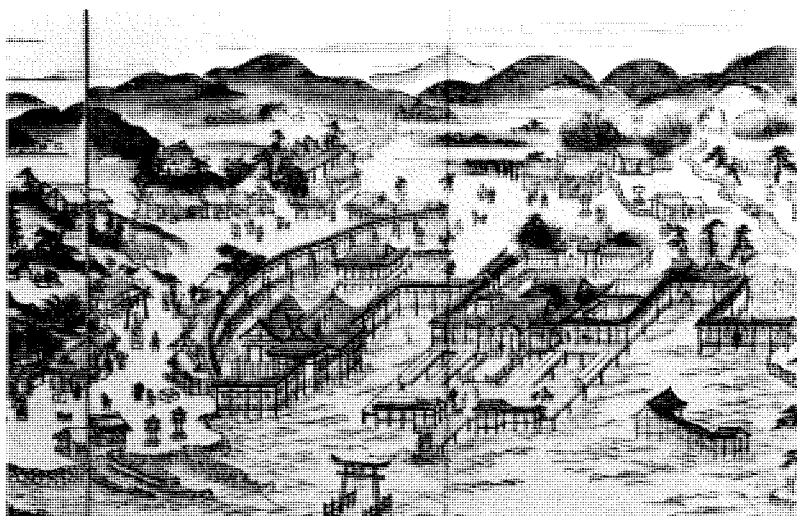
太夫人
若島座元

渡会栄吉

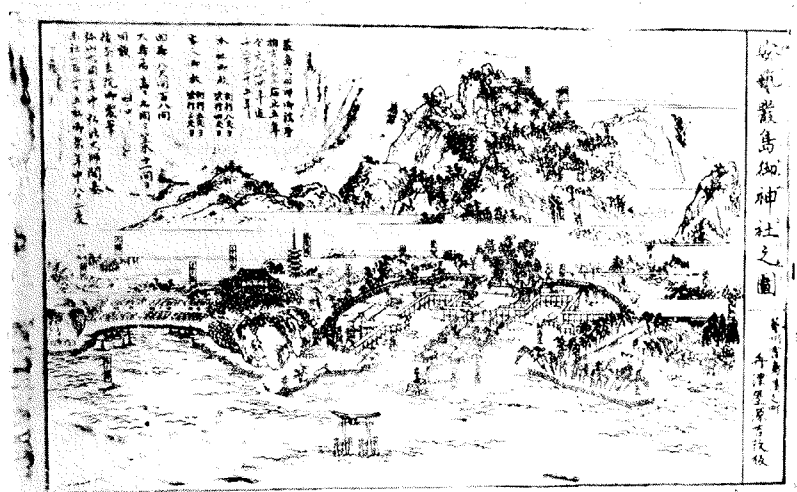
京 阪 若 手 歌 舞 伎 大 芝 居

嵐 信 藏 中 村 時 松 助 松 本 錦 幸 枝 中 東 調 二 郎 阪 村 珊 郎 市 川 元 之 助 松 本 いて 助 中 村 百 之 助 中 村 閔 三 郎 沢 村 閔 三 郎 阪 村 重 子 中 村 珊 子 嵐 信 長 片 岡 信 嵐 信

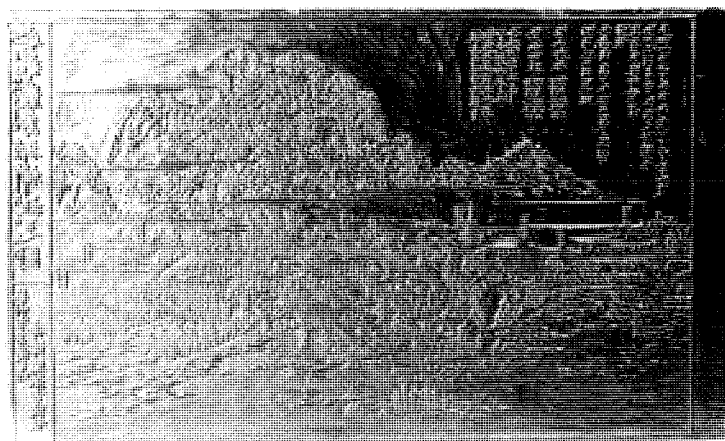
(注)18



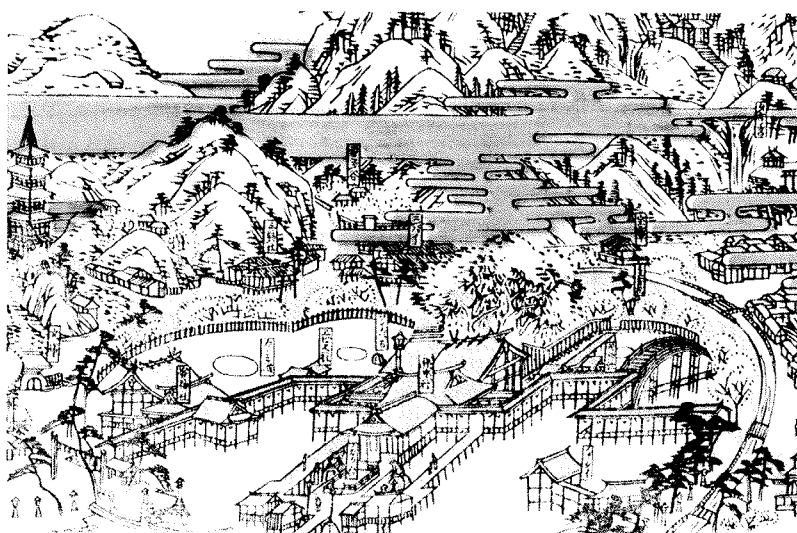
(注)19



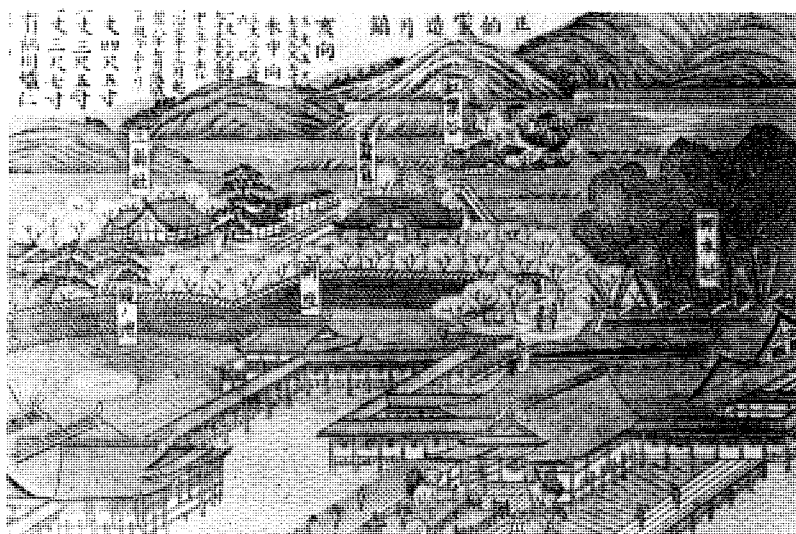
(注)20



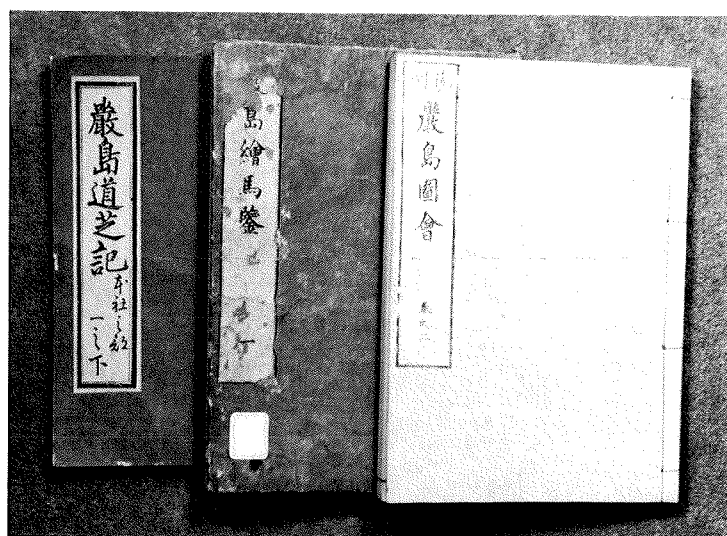
(注)24
部分



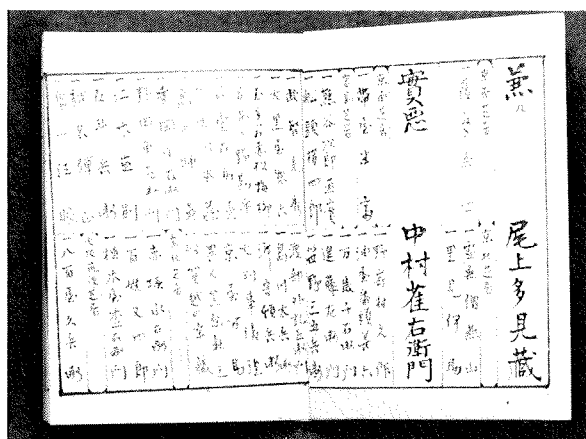
(注)25
部分



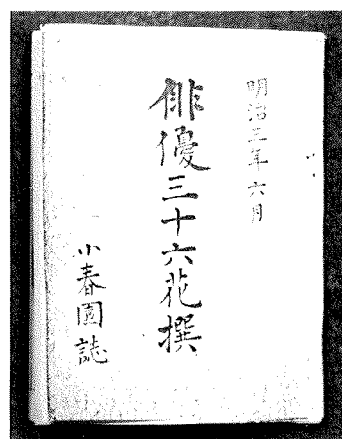
(注)26



(注)27

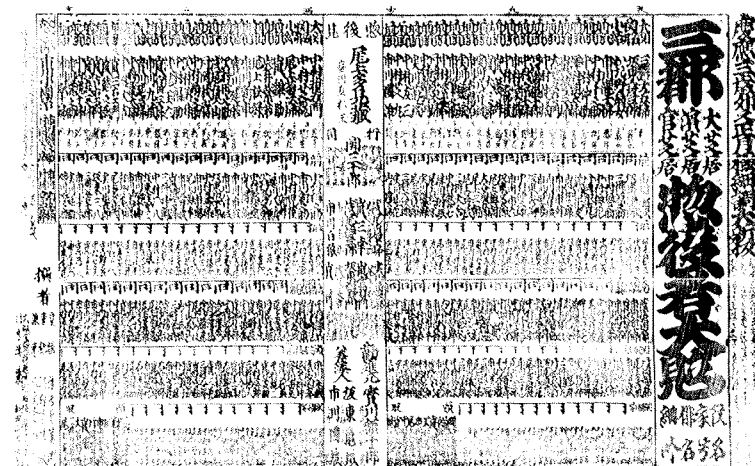


内容



表紙

(注)28



資料館の活動

1 入館者数

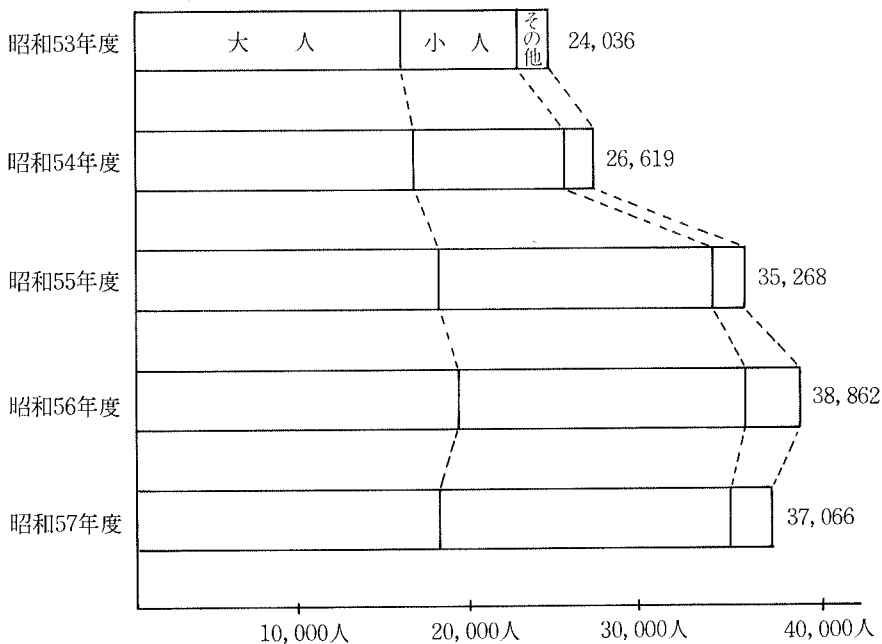
(昭和57年度)

開館以来の累計 240,528

月	大 人		計	小 人		計	その他	合計
	個人	団体		個人	団体			
4	1,331	105	1,436	300	103	403	195	2,034
5	1,696	123	1,819	535	3,011	3,546	330	5,695
6	970	130	1,100	33	2,182	2,215	210	3,525
7	1,165	132	1,297	171	191	362	203	1,862
8	2,693	0	2,693	874	0	874	406	3,973
9	1,052	154	1,206	604	257	861	147	2,214
10	1,778	236	2,014	491	1,997	2,488	172	4,674
11	1,797	274	2,071	176	3,951	4,127	272	6,470
12	439	33	472	16	0	16	98	586
1	1,087	0	1,087	191	50	241	144	1,472
2	872	30	902	22	0	22	76	1,000
3	2,044	0	2,044	387	916	1,303	214	3,561
計	16,924	1,217	18,141	3,800	12,658	16,458	2,467	37,066

※小人は小・中学生、その他は宮島町民・研究者など。休館日は12月26日～12月31日。

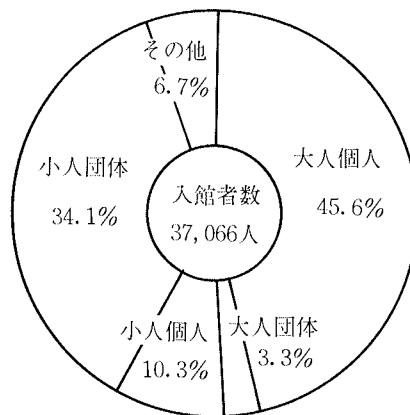
入館者数の推移 (昭和53年度から昭和57年度まで)



入館者構成の推移（昭和53年度から昭和57年度まで）

	50	66.0	93.4	100%
昭和53年度	大人	小人	その他	
		62.0	94.6	
昭和54年度				
		51.5	94.8	
昭和55年度				
		48.9	91.1	
昭和56年度				
		48.9	93.3	
昭和57年度				

入館者の構成（昭和57年度）



2 年度別予算一覧

	昭 和 53年度	昭 和 54年度	昭 和 55年度	昭 和 56年度	昭 和 57年度	備 考
報 酬	千 436	千 450	千 468	千 468	千 1,509	資料館協議会委員
賃 金	30	35	36	18	20	
報 償 費	100	110	110	60	65	展示資料借上謝礼など
旅 費	100	273	153	258	198	
需 用 費	2,200	2,700	3,909	3,466	3,702	消耗品費・光熱水費・印刷製本費など
役 務 費	50	60	106	124	111	通信運搬
委 託 料	3,821	5,629	3,899	3,708	3,716	事務補助・管理保守点検・庭園手入委託料など
使用料・賃借料	9	9	12	13	277	複写機使用料など
工 事 請 負 費	1,500				265	補修工事費など
原 材 料 費	50	50	50	78	67	資料作成・修繕用材料など
備 品 購 入 費	5,000	2,570	2,500	2,500	2,500	図書・展示資料購入費
負担金補助・交付金	1	460	486	496	534	学会協会負担金・補助金など
計	13,297	12,346	11,726	11,249	12,964	

3 資 料 収 集

(1)寄贈資料

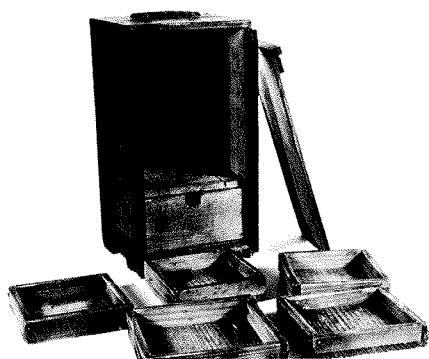
資 料 名	寄贈者名	数量・その他	資 料 名	寄贈者名	数量・その他
ピ ア ノ	宮 島 町	1点、メル ボルン製、 進駐軍使用	銭 箱	"	1点
丸 盆	"	1点	簞 笥	"	1点
壺	中村隆燈氏	1点	守 護 札	"	1点、木製
水 甕	宮島町公民館	1点	神 柵	"	1点
壺	富本好登氏	1点	礼 禱 札	"	1点、明治 42年
和 歌	"	1点、額装	守 護 札	"	1点、紙製
宮島ホテル写真	"	1点	"	"	1点、紙製
傘	竹本実氏	1点、紙製、 子供用	神 柵	"	1点
ふ い ご	野 村 氏	1点	蒸 籠	野坂元良氏	1点
輪 ころ が し	"	1点、鉄製	浄 瑠 璃 本	故住田キミヨ氏	1点、元治 元年、冊子 本、彦山権 現誓助剣
水 甕	"	2点	"	"	1点、明治 9年、冊子 本、平仮名 盛衰記
羽 釜	"	1点	"	"	1点、明治 16年、冊子 本、彦山権 現誓助剣
か ん な 台	"	1点	"	"	1点、明治 18年、冊子 本、菅原伝 授手習鑑、
酒 徳 利	磯部作一氏	1点	"	"	1点、明治 20年、冊子 本、増補朝 顔日記、
壺	"	1点	"	"	1点、明治 24年、冊子 本、壺坂靈 驗記
火 鉢	"	5点	"	"	1点、明治 41年、冊子 本、時雨の 炬燵
火 入 れ	"	1点、銅製	"	"	1点、明治 41年、冊子 本、かしゅん 伝兵衛、
台 秤	三宅定和氏	1点	"	"	1点、明治 41年、冊子
火 鉢	"	1点、銅製	"	"	
手 提 樽	"	1点	"	"	
注 連 縄	木村守氏	1点	"	"	
大 黒 像	"	2点、木製	"	"	
夷 像	"	1点、木製	"	"	
狛 犬	"	1点、陶製	"	"	
御 神 酒 徳 利	"	1点	"	"	
ろ う そ く 立	"	2点、陶製	"	"	
花 瓶	"	2点	"	"	
御 幣	"	10点	"	"	
折 敷 箱	"	1点、嘉永 3年	"	"	
皿	"	6点	"	"	
猪 口	"	4点	"	"	
"	"	2点	"	"	
旗	"	1点、布製、 祭事用	"	"	
す し 桶	"	1点	"	"	

資 料 名	寄贈者名	数量・その他
	"	本、 傾城恋飛脚
"	"	1点、大正 13年、冊子 本 伊賀越道中 双六
"	"	1点、昭和 3年、冊子 本 仮名手本忠 臣蔵
"	"	1点、昭和 7年、冊子 本、 絵本太功記
"	"	1点、昭和 11年、冊子 本 一の谷嫩軍 記
"	"	1点、昭和 13年、冊子 本 義士忠臣蔵
"	"	1点、昭和 35年、冊子 本 佐倉の曙
"	"	1点、冊子 本、新版歌 祭文
"	"	1点、冊子 本、関取一 代鏡
"	"	1点、冊子 本、再版一 の谷
"	"	1点、冊子 本、摂州合 邦辻
"	"	1点、冊子 本、伽羅先 代萩
"	"	1点、冊子 本、金毘羅 利生
"	"	1点、冊子 本、本朝二 十四季
"	"	1点、冊子 本、碁太平 記白石噺

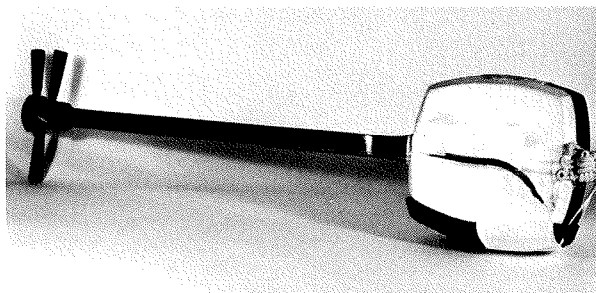
資 料 名	寄贈者名	数量・その他
"	"	1点、冊子 本、婦女庭 訓
"	"	1点、冊子 本、ひらか な盛衰記
"	"	1点、冊子 本、奥州安 達原
"	"	1点、冊子 本、加々見 山
"	"	1点、冊子 本、鎌倉山
"	"	1点、冊子 本、傾城阿 波鳴門
"	"	1点、冊子 本、摂州阿 漕浦
"	"	1点、冊三 間堂棟由来
筑前琵琶端歌集	"	1点、冊子 本、小督
端 唄 本	"	1点、冊子 本、城山
"	"	1点、冊子 本、常陸丸
"	"	1点、冊子 本、備後三 郎
長 唄 本	"	1点、冊子 本、松竹梅 乙女舞振
謡 曲 本	"	1点、明治 43年、冊子 本、隅田川
人 形 役 者 絵	"	1点、紙本 着色、額装、 淡路人形
見 台	"	1点、明治 41年
見 台 総	"	1点、明治 41年
見台総付属金具	"	2点、明治 41年、銅製
撥	"	2点、象牙 製
浄瑠璃三味線	"	1点、花欄・ 紫檀・犬皮・ 紙製

資 料 名	寄贈者名	数量・その他
尻 あ て	"	1点、竹・鉄製
銅 羅	"	1点、彫金入
槌	"	1点、木製
印	"	1点、木製、株式会社宮島劇場
肩 衣	"	12点、紙・竹製、家紋入
袴	"	2点
"	"	1点、家紋入
綿 衣	"	2点
葛 籠	"	1点、柿渋塗
"	"	1点、漆塗
櫛	"	7点、黄楊製
"	"	1点、べっ甲製
髻 止	"	1点、黄楊製

資 料 名	寄贈者名	数量・その他
"	"	4点、べっ甲製
筭	"	4点、べっ甲製
か ん ざ し	"	2点、銀製、平打、花
"	"	2点、銅製、平打、花
"	"	4点、べっ甲製、平打
"	"	2点、べっ甲製、花
力 紐	"	1点
腹 当	"	1点
拍 子 木	"	1点
ト ラ ン ク	"	1点、革製
火 鉢	"	2点
レ コ ー ド	藤山盛雄氏	131点、新民謡・宮島小唄他



折敷箱



浄瑠璃三味線

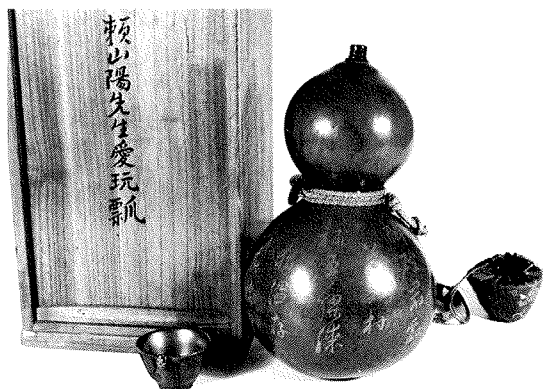
(2)寄託資料

資 料 名	寄託者名	数量・その他
布 袋	平野勝氏	1点、一角焼
寿 老 人	"	1点、一角焼

資 料 名	寄託者名	数量・その他
瓢 箪	宮島町観光課	1点、伝頼山陽愛玩瓢
酒 盃	"	1点、一国齋金城作、波木井昇斎刀



寿老人



瓢箪

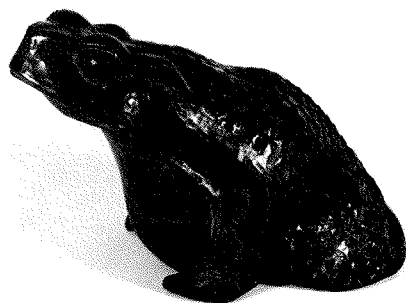
(3)購入資料

資 料 名	数量・その他
厳 島 風 景 図	1点、小川清処画、紙本墨画、軸装
酒 徳 利	2点、宮島焼
天 狗 の 図	2点、木版、紙本多色刷
毛利元就書状	1点、棚守房顕宛
安芸厳島之図	1点、嘉永7年、木版、紙本多色刷

資 料 名	数量・その他
竹 根 細 工	9点、漁人、鶴、布袋、亀、ヒキ他
絵 葉 書	2点
牡蠣型社景菓子器	1点、一角焼
宮 島 図	1点、小川清処画、屏風装2曲1双



毛利元就書状



竹根細工ヒキ

(4)その他

広島県立図書館及び広島市立中央図書館所蔵の雑誌『尚古』（明治39年11月創刊、その後大正11年1月より『芸備史壇』に改題）約90冊を複写（町史編さん室との共同）。

4 調査・研究等

1) 館蔵資料の調査

- 昭和56年度に引き続いて、宮島芝居に関する資料の調査及び分類整理
- 宮島町が戦後撮影したネガフィルムの分類整理
- 宮島細工の伝統産業指定申請に伴う、木工関係資料の調査

2) 聴き取り調査

資料収集に伴う聴き取り調査 3 件

なお、調査等に関する個別的な活動は、以下のとおりである。

昭和57年 5月23日～25日：日本展示学会（大阪市）

5月29日：資料調査（廿日市町・住田氏）

6月2日： ”

7月7日： ” （廿日市町・飯田氏）

7月9日：日博協中国支部研修会（広島市）

7月10日：資料調査（宮島町・野坂氏）

7月30日～31日：西日本人文系学芸員研究会（松江市）

9月16日～17日：広島県歴史民俗資料館等連絡協議会（東城市）

9月26日～29日：資料調査（宮島町・野坂氏）

10月10日～11日：日本民具学会（横浜市）

11月4日：資料調査（大野町・吉田氏）

12月9日： ”

1月26日： ” （広島市・県立図書館）

2月3日：広島県歴史民俗資料館等連絡協議会（神辺町）

2月7日：資料調査（大野町・吉田氏）

2月16日： ” （広島市・みよし屋）

2月23日： ” （広島市・天満屋）

3月2日・4日・8日：資料調査（広島市・県立図書館）

3月26日： ” （広島市・市立中央図書館）

5 展 示・普 及

昭和57年 4月26日：「厳島合戦絵巻」・「厳島図会」の撮影（中国放送）

5月1日：「弁才天と清盛」・「芝居口上絵」他の撮影（宮島町観光課）

5月15日：「厳島七浦屏風」・甲冑の撮影（中国放送）

5月15日：展示アンケート（～12月15日）＊

5月17日：『日本民俗学』（「博物館ニュース」）への寄稿・「宮島歴史民俗資料館」

5月20日：来島指導（三篠町公民館・長寿大学生，30名）

7月4日：「厳島図会」の撮影（中国放送）

7月28日：講演「宮島の歴史」（広島県高等学校商業クラブ研修会）

8月6日，11日，18日：第4回資料館セミナーの開催＊

8月12日：見学案内（宮島地域研究会）

8月21日：講演「宮島の歴史」（広島県公立高等学校広島支部事務長研究協議会）

8月22日：「延年福神像」・「玉取祭図」・「厳島図会」の撮影（中国放送）

8月30日：社会科学習への協力・「宮島の歴史」（広島県立井口高校生，5名）

9月7日：見学案内（東北学院大学博物館学実習生，80名）

9月15日：見学案内（インドネシア教員使節団，25名）

9月17日：「誓真像」・「二位法尼像」の撮影（中国放送）

9月24日：見学案内（広島修道大学博物館学受講生，22名）

10月14日：社会科学習への協力・「宮島の歴史」（宮島中学郷土研究クラブ，4名）

10月27日：博物館実態調査への協力（広島大学院生，2名）

10月28日：社会科学習への協力・「宮島の歴史と伝説」（千葉県立国府台高校生，8名）

11月5日：「盆」・「菓子器」（宮島彫）の撮影（NHK）

11月9日：社会科学習への協力・「宮島の歴史」（宮島小学生，6名）

11月13日：「革染印伝」の貸出し（～昭和58年4月5日，サントリー美術館）

11月25日：社会科学習への協力・「宮島の歴史」（広島県立ろう学校生，6名）

11月26日：「厳島図会」（写真）の貸出し（叢文社）

12月19日：見学案内（兵庫県篠山町教育委員会）

1月5日：「富くじ証文」・「木駒」の撮影（中国放送）

2月6日：「厳島図会」の撮影（ 〃 ）

3月5日：「かんざし」・「わたぼうし」・「ひのし」他の貸出し（～昭和59年3月31日，広島県立歴史民俗資料館）

3月17日：資料提供（大阪城南女子短大・柳瀬氏）

3月20日～27日：田原一久写真展の開催＊

この他に、資料調査等に対する協力は10件。

※アンケート調査

資料館では、昭和53年7月から12月にかけて来館者に対し、アンケートによる調査を行い、その目的・方法・結果等を『年報』No.1・No.2に掲載した。また、『年報』No.3には、展示の改定へ向け、当時の展示資料の構成内容・配置及びその問題点を記しておいた。

今回のアンケート調査は、こうした点を踏まえ、来館者に、特に、展示に対する感想・意見を求めたものである。期間は、昭和57年5月から12月の約7ヶ月間、前回と同様の方法で行った。

当館では、これら結果を基に更に幅広く意見を聴取し、開館後10年を経過した施設の改善も含め、他の機能・活動とかかわらせながら、具体的な展示の改定作業に取り掛りたいと考えている。

調査表とその結果は、以下のとおりである。

宮 島 歴 史 民 俗 資 料 館 調 査 表

- 入館日 昭和 年 月 日 (団体・個人)
- 住 所 都道府県 区市郡
- 年齢・性別 歳 (男・女)
- 職 業 会社員 (事務・技術・管理)、公務員 (事務・技術・管理)、商業、工業、サービス業、農業、林業、漁業、教員、学生、自由業、主婦、その他 ()
- 何度目の入館ですか。 初めて・2回目・3回目・その他 () 回目
- 入館時間はどのくらいですか。 () 分
- 展示資料の数量についてどう思われますか。
1. 多すぎる、 2. 適当である、 3. 少なすぎる
- 資料の展示・配置についてどう思われますか。
1. 現在のままでよい、 2. もう少し整理して欲しい、 3. 映像・スライド・解説テープなどの視聴覚機器をとり入れて欲しい、
4. その他 ()
- 展示資料の説明文についてどう思われますか。
- a 数量 1. 多い 2. 適当である、 3. 少ない
- b 内容 1. 文章が長い、 2. 文章が短い、 3. 文章がむづかしい、 4. 専門的すぎる、 5. 理解しやすい
- 展示資料 (館) の中で興味をもたれたのはどれですか。3つ以内で○をして下さい。
1. 展示館A—水がめ、のこぎり、うすなどの食関係、山仕事、農作業関係の資料
2. 展示館B—一年中行事関係の資料
3. 展示館C—杓子などの木工関係資料
4. 展示館D (階下)—木工関係資料、民具を中心とした生活資料
5. 展示館D (階上)—文書、書跡、絵画を中心とした歴史資料
6. 保存民家—江戸時代の商家を修理・保存
7. 代表民家—宮島の代表的な民家
8. その他 ()
- 展示室の広さについてどう思われますか。

- 1.広い、 2.適当である、 3.狭い

○展示館D（階上）～歴史資料を展示～に兜（かぶと）を展示しています。この資料は宮島に関係したものではありませんが、収集家のご好意により、特に展示されたものです。この資料についてどう思われますか。

- 1.宮島に関係なくても、見る機会が少ないから、これからも展示して欲しい、
2.展示の配置を工夫すれば、展示してもよい、
3.宮島に関係のないものは、展示しないほうがよい、
4.その他（ ）

○資料をご覧になってどう思われましたか。

- 1.よかった、 2.普通、 3.よくなかった、
4.その他（ ）

○今後の資料館の活動に対して望まれること、その他、ご意見をお聞かせ下さい。

調査結果

○回答者数

A（～18才）	——943人	} 計 1,966人
B（19～39才）	——803人	
C（40～59才）	——183人	
D（60才～）	——37人	

○入館回数

回答者数 1,966人（回答比100％）

	初めて	2回目	3回目	4回以上
A	884	36	7	16
B	757	30	11	5
C	171	6	3	3
D	34	1	0	2
計 (%)	1,846 (93.9%)	73 (3.7%)	21 (1.1%)	26 (1.3%)

○入館時間

回答者数 1,939人（回答比98.6％）

	～19分	20分～	30分～	40分～	50分～	60分～	90分～
A	106	177	338	116	22	156	8
B	33	84	302	158	40	162	19
C	4	8	53	43	13	48	13
D	1	1	4	9	2	16	3
計 (%)	144 (7.4%)	270 (13.9%)	697 (35.9%)	326 (16.8%)	77 (4.0%)	382 (19.7%)	43 (2.2%)

○ 展示資料の数量

回答者数 1,951人 (回答比99.2%)

	多 い	適 当	少 な い
A	42	788	108
B	71	697	27
C	14	162	5
D	4	32	1
計 (%)	131 (6.7%)	1,679 (86.0%)	141 (7.2%)

○ 資料の展示・配置

回答者数 1,861人 (回答比94.7%)

	現状でよい	少し整理するとよい	視聴覚機器を入れる	その他
A	485	75	372	3
B	275	127	281	15
C	91	20	74	5
D	24	2	12	0
計 (%)	875 (47.0%)	224 (12.0%)	739 (39.7%)	23 (1.2%)

○ 説明文の数量

回答者数 1,867人 (回答比95.0%)

	多 い	適 当	少 な い
A	81	698	107
B	23	617	135
C	0	151	23
D	0	31	1
計 (%)	104 (5.6%)	1,497 (80.2%)	266 (14.2%)

○ 説明文の内容

回答者数 1,784人 (回答比90.7%)

	文章が長い	文章が短い	文章がむづかしい	専門的	理解しやすい
A	91	53	292	89	363
B	61	97	95	37	423
C	7	15	4	2	126
D	2	2	0	0	25
計 (%)	161 (9.0%)	167 (9.4%)	391 (21.9%)	128 (7.2%)	937 (52.5%)

○興味ある展示資料

	展示館 A	" B	" C	" D (階下)	" D (階上)	保存民家	代表民家	その他
A	305	154	221	350	323	324	336	22
B	240	140	305	346	304	378	355	13
C	49	33	31	74	78	97	79	3
D	12	7	12	14	13	18	6	0
計	606	334	569	784	718	817	776	38

○展示室の広さ

回答者数 1,868人 (回答比95.0%)

	広 い	適 当	狭 い
A	209	585	78
B	85	641	58
C	14	153	9
D	5	28	3
計 (%)	313 (16.8%)	1,407 (75.3%)	148 (7.9%)

○宮島関係以外の資料展示

回答者数 1,836人 (回答比93.3%)

	展示してほしい	配置を工夫すれば展示してよい	展示しない方がよい	その他
A	626	146	77	4
B	413	244	102	7
C	99	49	31	0
D	24	6	8	0
計 (%)	1,162 (63.3%)	445 (24.2%)	218 (11.9%)	11 (0.6%)

○感想

回答者数 1,861人 (回答比94.7%)

	よかった	普 通	よくなかった	その他
A	623	233	22	0
B	497	263	10	7
C	119	47	2	1
D	30	5	0	2
計 (%)	1,269 (68.2%)	548 (29.4%)	34 (1.8%)	10 (0.5%)

○活動等に対する意見

(1)資料の収集（展示）についての要望

歴史資料（平家関係、毛利氏関係等々）、民俗資料（生活風俗、交通、伝説関係等）、現代資料（統計類等）及び、それらの比重の問題について。

(2)展示（方法）についての要望

動態展示、実演コーナー、空間の有効的利用、テーマ展示、説明文を補う冊子類、展示環境の問題等について。

(3)運営方法、活動に対する要望

PRの方法、閲覧コーナー等の施設の充実、資料館の位置づけ（厳島神社との関係、活動の方針等）の問題等について。

※回答者数は、500人を越え、多様な意見が寄せられた。相反する意見もかなりの数にのぼっている。以上は、それらのうち、数的に多かった意見の項目を挙げたものである。

※第4回資料館セミナー

目 的 明治28年に刊行された『新撰厳島独案内』の版本を用い、参加者自らが版を刷り、その文字を解読することによって資料の扱い方を学び、また、そこに記されている内容をもとに宮島の歴史について考えることを目的とする。

主 催 宮島歴史民俗資料館

日 時 昭和57年8月6日、11日、18日、午前9時30分から午後3時30分まで（8月11日、18日は宮島中学校生を対象）

場 所 宮島歴史民俗資料館、宮島町公民館中西分館

対 象 中学2年生

参加者 39名（うち33名は宮島中学校）

指導者 河野氏（宮島中学校教諭）、高橋（当館学芸員）

内 容 ・印刷の歴史、木版刷りの材料・刷り方などについての説明

・木版刷り（材料は美濃紙、固形墨、糊）

・解読と解釈

・宮島の歴史についての説明

（宮島中学校生は、全て版を刷り、一冊の本を作成した）

※田原一久写真展「厳島光景」

目 的 宮島をはぐくんできた人々の足跡を多種多様な資料をもってたどり、その歩みを将来の糧に、という考えの下、いつもは見過ごされがちな小さな光景を通して、宮島の美しさを見直そうとした。

主 催 宮島歴史民俗資料館

日 時 昭和58年3月20日～27日

場 所 展示館D（1階の一部）

内 容 厳島神社廻廊8点、紅葉6点、みせん道4点、その他4点（計22点）

○説明文（英文）の作成

当館には、外国人の来館者が比較的多く、外国人用パンフレット作成の要望が従来よりあった。それに対しては、当館のパンフレットをそのまま英文タイプし配布してきたが、各々の展示資料については、説明が充分に行き届いていなかった。そのため、昭和57年度は、和文の説明文を付しているものについて、それを英語に訳し添付した。ただし、用語、文章表現、規格等について改善すべき点が数多く残されている。

○宮島の歴史と民俗No.1（「宮島歴史民俗資料館年報」を改める、町史編さん室との共同編集）の刊行。B 5 版・64ページ、昭和58年3月30日発行。

6 歴史民俗資料館協議会

昭和57年度資料館協議会委員

委員名（順不同）◎は委員長，○は副委員長

後藤 陽一 広島修道大学教授

定宗 一宏 広島文化女子短大教授

斉藤 清三 広島県教育委員会文化課長

岡田貞治郎 広島県文化財審議委員

野坂 元良 厳島神社宮司

平山 真栄 大願寺住職

◎岩村 益文

小西 延穂

木上 晴登

宮郷 安輝

木村 義実 宮島町議会議長

森脇 立夫 宮島町議会副議長

○藤岡 国男 宮島町社会教育委員長

宮郷長太郎 宮島町議会議員

昭和57年度資料館協議会

第1回 昭和57年7月14日

協議内容

○資料館の現状視察を終えての施設面の問題点について

○昭和57年度資料館運営について

資料館の活動と町史編さん室との関係、資料の収集方針、聴き取り調査の問題。

○収蔵庫について

収蔵庫改善のための具体的作業として、町当局へ具申書を提出すること、そのための草案を資料館で作成することを確認。

第2回 昭和57年11月18日

協議内容

○「資料館における資料の収蔵に関する具申」書について

収蔵庫等の施設の問題に関する協議内容と経過の報告（昭和55年度以降）、具申書（草案）、収蔵庫改善に関わる補修工事の仮設計図及び具申書と「博物館構想」との関わりについての検討。

7 施設 の 整備

- 1) 保存民家の屋根の部分的な葺替
- 2) 展示館 a の軒先の補修
- 3) 展示館 C の床下の補強、床下への換気口の設置

8 購入図書・受贈交換図書

購 入 図 書

編著者名	書 名	出 版
文化庁	日本民俗地図Ⅴ～Ⅶ	国土地理協会
文化財虫害研究所	文化財の燻蒸処理標準仕様書とその補遺	文化財虫害研究所
原田伴彦 他	図録 都市生活史事典	柏書房
長野正孝	広島湾発達史	中央書店
尚学図書	国語大事典	小学館
	日本歴史地名大系、第35、39巻	平凡社
渡辺則文	産業の発達と地域社会	溪水社
小泉和子	箏箏 ものと人間の文化史46	法政大学出版局
新城常三	新稿社寺参詣の社会経済史的研究	塙書房
大崎町史編修委員会	大崎町史	大崎町
日本民俗学会	日本民俗学文献総目録	弘文堂
島屋政一	印刷文明史第1～5巻、別巻	五月書房
北村哲郎 他	日本の博物館1～13	講談社
	新修大津市史5 近代	大津市役所
三輪茂雄	粉の秘密・砂の謎	平凡社
内藤匡	新訂古陶磁の科学	雄山閣出版
竹内理三 他	日本歴史地図、原始・古代編上・下	柏書房
文化庁文化財保護部	全国遺跡地図24、26、28、30、31、32、 35～39、43、45	国土地理協会
「重要文化財」編さん委員会	新指定重要文化財1～13	毎日新聞社
芹沢長介 他	日本やきもの集成1～12	平凡社
半沢重信	設計計画シリーズ歴史民俗資料館	井上書院
岡田重精	古代の齋忌	国書刊行会
瀬戸内海総合研究会	瀬戸内海研究第1～5巻（再刊）	国書刊行会
日本専売公社	日本の喫煙具付外国の喫煙具	（社・法）専売事業協
中国新聞社	広島県大百科事典上・下	中国新聞社
新藤久人 他	中国・四国地方の民具	明玄書房
小谷方明 他	近畿地方の民具	〃
山口賢俊 他	中部地方の民具	〃
戸川安章 他	北海道・東北地方の民具	〃
和田正洲 他	関東地方の民具	〃

柳田国男	年中行事図説	岩崎美術社
大藤時彦 他	柳田国男写真集	〃
日本生活学会	生活学論集 1～3	ドメス出版
後藤陽一	近世村落の社会史的研究	溪水社
福山市史編さん会	福山市史上・中・下巻	福山市史編さん会
郡誌編さん部	御調郡誌	明治文献
沼隈郡役所	沼隈郡誌（復刻）	芸備郷土誌刊行会
松岡久人	広島大学所蔵 猪熊文書(1)	福武書店
小谷方明	大阪の民具・民俗誌	文化出版局
国史大辞典編集委員会	国史大辞典 3・か	吉川弘文館
市場直次郎 他	九州・沖縄地方の民具	明玄書房
遂次刊行物		
歴史学研究	503～514	
日本歴史	407～418	
地方史研究	173～176	
広島県文化財ニュース	93～96	
博物館研究	第17巻4号～第18巻3号	

受 贈 交 換 図 書

〔広島県〕

広島県史Ⅲ、Ⅵ、Ⅴ

〔広島県立歴史民俗資料館〕

年報 昭和55年度

〔広島県埋蔵文化財調査センター〕

ひろしまの遺跡 第9号

〔広島県立美術館〕

探美 No.32

日本の洋画展 一戦後30年の展望一 図録

〔広島県立図書館〕

広島県内公共図書館 郷土資料図録 第23号

広島県立図書館蔵 頼山陽に関する文献目録

〔広島市教育委員会〕

広島市の文化財 第19集、第20集、第21集

〔広島市公文書館〕

紀要 第5号

狩小川村役場文書目録、広島市公文書館所蔵資料目録第3集

〔福山市立福山城博物館〕

昭和57年 春季特別展 肉筆浮世絵の美

〔広島民俗学会〕

広島民俗 第18号～第19号

〔宮島町〕

1983年 宮島町町勢要覧

〔宮島町教育委員会〕

広島県の近世社寺建築 広島県文化財調査報告書第13号

長添山古墳 萩市埋蔵文化財調査報告第1集

佐伯郡スポーツ戦後三十年史

全国遺跡地図 広島県

〔宮島町商工会〕

宮島町観光消費流通調査報告書

〔東城町立帝釈郷土館〕

帝釈文化 第12号

〔府中ユネスコ協会〕

芦田川流域古老聞書集 第1集

〔府中町教育委員会〕

あき ふちゅうのあゆみ

〔神辺町立歴史民俗資料館〕

歴史民俗資料館 資料目録Ⅱ

〔加計町教育委員会〕

遅越第一号古墳発掘調査報告

〔草戸千軒町遺跡調査研究所〕

草戸千軒 No.94～105

草戸千軒町遺跡 一第28・29次発掘調査概要一

〔御調町教育委員会〕

御調文学 No.17

〔島根県立博物館〕

島根県立博物館年報 昭和56年度

〔島根県津和野町立郷土館〕

津和野郷土しおり

〔津和野産業資料館〕

産業資料館案内

〔津和野町民俗資料館〕

養老館民俗資料館案内

〔岡山県立博物館〕

岡山県立博物館だより 18号、19号
研究報告 3

古地図 一地図が語る歴史と文化一

〔山口県立山口博物館〕

山口県立山口博物館館報

〔読谷村立歴史民俗資料館〕

読谷村立歴史民俗資料館年報 第6号
沖縄の成女儀礼

〔鹿児島県立博物館〕

鹿博だより No.4～No.5
博物館要覧 一昭和57年度一
鹿児島県立博物館研究報告 第1号（昭和57年度）

〔北九州市立歴史博物館〕

昭和57年度企画展 はかる道具 ～身近な計測具～
北九州市立歴史博物館年報4 一昭和54年度一
北九州市歴史博物館年報5 一昭和55年度一
食の文化展 一変りゆく食具一

〔長崎市立博物館〕

長崎市立博物館館報 第22号

〔福岡市立歴史資料館〕

福岡市立歴史資料館年報No.10 1981年度
福岡市立歴史資料館研究報告 第6集
古代の顔 福岡市立歴史資料館開館10周年記念特設展
福岡市立歴史資料館研究報告 第7集

〔愛媛県立歴史民俗資料館〕

愛媛県博物館資料総合目録第4集 民俗文化財

〔松山市立子規記念博物館〕

季刊 子規博だより VOL2-3、VOL2-4

〔瀬戸内海歴史民俗資料館〕

瀬戸内海歴史民俗資料館だより No.13
瀬戸内海歴史民俗資料館年報 第7号

〔神戸市立博物館〕

博物館だより No.2

〔国立民族学博物館〕

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館国内資料調査委員 調査報告集3

〔京都国立博物館〕

昭和56年度 京都国立博物館年報

〔奈良県民俗博物館〕

民俗博物館だより VOLIXNo.1～VOLIXNo.3
民家のある民俗公園
奈良県立民俗博物館研究紀要 第6号

〔新潟県美術博物館〕

新潟県美術博物館だより 16
新潟県美術博物館報（昭和55年度）

〔石川県立郷土資料館〕

郷土資料館だより 第37～38号
だいどころの歴史
図録 大鋸コレクション

〔神奈川大学日本常民文化研究所〕

民具マンスリー 15巻1号～5号、9号～12号
要覧1982

〔平塚市博物館〕

平塚市博物館年報 No.5
平塚市博物館研究報告 自然と文化No.5
常設展示解説 展示は語る
夏季特別展 堀り起こされた平塚

〔東京都近代文学博物館〕

館報 駒場野 第33号
特別展示 日本の詩歌 一大正一
年表 日本の詩歌 一大正一

〔郵政省通信博物館〕

資料図録 No.21～No.23
資料目録 図書編上・下

〔船の科学館〕

船の科学館報 VOL3～VOL4

〔ペンタックス ギャラリー〕

Pentax Gallery News No.51～No.52

〔サントリー美術館〕

サントリー美術館 第66号～第68号

サントリー美術館100選

日本のデザイン 染め革

〔紙の博物館〕

百万塔 第53号～54号

〔財団法人 家具の博物館〕

博物館だより No.3

〔日本交通公社〕

古戦場に立つ

〔栃木県立郷土資料館〕

サルビア No.11

秋山の民俗 一葛生町大字秋山一

〔埼玉県立歴史資料館〕

埼玉県歴史資料館展示解説シート

収蔵資料目録 I

館報 第3号 昭和56年度

〔埼玉県立博物館〕

埼玉県立博物館だより VOLIX-3 (41号)

VOLIX-4 (42号)

〔埼玉県立民俗文化センター〕

要覧

〔群馬県立歴史博物館〕

博物館だより No.9

〔財団法人 会津民俗館〕

会津民俗館だより 館報第6号

〔東北歴史資料館〕

山村の生活展あんない

新幹線と遺跡展

縄文の美 川戸市是川遺跡展

年報 昭和56年度

近世の北上川と水運

〔秋田県立博物館〕

博物館ニュース No.33～No.37

〔岩手県立農業博物館〕

農業博物館だより No.31

〔寺田富夫氏〕

所沢市史研究 第6号

〔西村重則氏〕

風雪七十年の回想 一甲冑翁の記一

〔藤下憲明氏〕

桜尾城とその時代

町史のあゆみ

1. 日誌

- 昭和57年 4月11日 医科芸術クラブで「宮島の歴史」について話す。
- 4月13日 広島三篠婦人会来島案内。
- 4月16日 広島県史編さん室にて宮島関係史料の検索を行なう。
- 4月26日 廿日市法務局にて『旧土地台帳』から、宮島部分をカード約3000枚に筆写し、収集する。11月30日終了。
- 4月28日～ 大野町中央公民館にて、新田家、大島家、中丸（主）家、中丸（匡）家、所家文書から71点の史料の写真撮影を行ない、フィルムにて収集する。
- 5月8～9日 中四国民具学会（岡山）に参加する。会員の方より長谷川明著『奥備中の民謡』（岡山民俗学会、昭和57年）に「宮島の歌」が所収されていることを聞き、購入する。
- 5月9日 広島民俗学会が宮島で臨地研究会を開き、「宮島の民俗」について話をする。
- 5月12～13日、26～27日 大野町史料の写真撮影を継続する。
- 5月14日 藤原健蔵氏、相良英輔氏来室。
地理部門の打合せをする。
『済美録』（広島県史編さん室所蔵写真版）より宮島関係記事の複写収集につき打合せをする。
- 5月29日 堤正信氏広島女子大学生とともに島内の地理景観の实地踏査をする。
幸町松岡邦充氏より明治期の慰労状など3点の寄託をうける。
- 6月8日 ふるさと運動打合わせ会に参画し、町史と社会教育運動との連携をはかる。
- 6月10日 山形県松山里仁館高校生約100名へ「宮島の歴史と民俗」について話す。
- 6月15日 千代田町史六郷寛氏来室。
- 6月17・22・23日 広島大学文学部国史研究室において『堀川町覚書』など約40点の史料を写真撮影して収集する。
- 6月18日 大町吉田弘氏所蔵史料314点の目録を作成する。
- 6月26日 町史編さん小委員会、於広島。
- 6月30日 弥山諸堂の写真撮影をする。
- 7月14・15・19・22・23日 吉田弘氏所蔵史料の写真撮影をし、収集する。
『史料綜覧』から瀬戸内、宮島関係記事を抜き書きし、ファイル

にて収集する。

7月21日 ふるさと運動実行委員会。

7月30日 東博小松茂美氏来島、後藤、松岡、岡田、野坂宮司各氏と美術工芸編の取り組み、調査方法について話し合う。ここにおいて、町史構成案の「建築と美術工芸」について「美術工芸」編を別途に立てることが申し合わされ、小松先生に全面的な協力をお願いする。

8月17日 岡山県中学校社会科研究会来島案内。

8月20～30日 大願寺文書260点の目録を作成する。

8月24日 中之町松本幹夫氏所蔵史料70点の目録を作成し、写真にて収集する。明治末～大正期の番船関係の帳簿が中心である。

9月3日 県民俗文化財分布調査検討委員会。

9月3～5日 山県郡豊平町香川家調査。

国立史料館の資料所在調査に参加。香川家所蔵史料に宮島仁王門再建の願主となった記録がある。〔家記録〕

9月7～10日 大願寺所蔵史料の写真撮影をおこない収集する。

9月16・17日 県歴史民俗資料館等連絡協議会、東城町。

10月9～11日 日本民具学会、民具研究講座。横浜・神奈川大学。

河岡武春、木下忠両氏に会い、倉吉の鐙口資料を教えてもらう。

10月12～16日 広島大学頼祺一氏と共に、東京の内閣文庫、国会図書館、都立中央図書館において、文芸・地誌関係史料の調査をおこない、100点余をマイクロフィルムにて収集する。

10月28日 千葉国府台高校生に「宮島の歴史」について話す。

大野町中央公民館で「民間信仰」について話す。

11月4～12日 大願寺史料54点の目録を作成し、写真にて収集する。

11月7日 五日市町楽々園公民館コミュニティースクール「歴史と自然を訪ねて」100名来島案内。

11月9日 舟入町婦人学級30名来島案内。

11月13～14日 県文化財臨地研究会、神辺町。

11月17日 自転車協会研修会にて「宮島の歴史について」話をする。広島市東婦人会60名来島案内。

11月25～26日 松山市子規記念館において、子規関係の文献、伊予の地誌、紀行文などから関係部分を複写収集する。

福田直記氏(宮島町文化財審議会委員)から町史の構想について話を伺う。
また氏がこれまでに収集された地誌、文芸、紀行などの史料を借用する。

11月27～28日 中四国民具学会 松山市
各地の研究者と町史の民俗編
について話す。

松山市周辺の民俗調査で、厳
島神社を探して砥部町まで行
く。砥部にも宮島社があり、
宮島に来ていた焼物も砥部で
焼かれていることを確かめる。
国立歴史民俗博物館岩井宏實
助教授と三津を探ね、厳島神
社を調べる。



12月9日 岡田貞治郎氏と共に佐藤重夫氏
(当時呉高専校長)を訪ねる。

宮島町史建築編の調査、執筆に
ついて意見をうかがい、編さんへの協力をお願いし、快諾していただく。

12月12日 大竹市郷土学習講座来島案内。

12月13日 ふるさと運動の一環として、宮島中学生と「お島廻り」をする。

12月14～24日 岩村喜代人氏所蔵の「岩惣止宿帳」ほか112点の明治期史料の目録を作成
し、写真にて収集する。

12月18日 広島市で個人蔵「厳島図」の調査をする。

昭和58年1月5～6日 県史編さん室にて『済美録』からの抜き出し、複写収集をおこなう。

1月15日 府中町南公民館寿大学で「宮島の歴史と風俗」について話をする。

県民俗分布調査検討委員会。

1月17～26日 岩村家文書の写真撮影を継続して行ない収集する。

1月28日 町同和教育懇談会。

広島商船高専東皓傳教授来室。

2月2～4日 県歴史民俗資料館等連絡協議会、神辺町。

2月8～28日 県史編さん室にて『済美録』調査を継続する。

2月15日 県民俗分布調査検討委員会。

2月18日 広島県警察学校生90名史跡見学の案内をする。

2月22日 町職員同和教育研修会。

3月1日～4日 役場廃棄資料の収集整理。

3月7日 重要文化財林家住宅見学説明会。

3月11日 西独ポッフム大・ペーター・シェラー教授、広島修道大・米倉二郎教授、広島
大・森川洋教授、広島女子大・堤正信助教授来島。

3月14日 滝町所倍利氏所蔵史料52点の目録を作成し、写真にて収集する。

- 4月5日 野村瑞豊氏来室。
- 4月8日 県内杓子調査。
- 4月10～15日 収集フィルムの整理。
- 4月14日 広島電鉄新入社員研修会30名「宮島の歴史」について話す。
- 4月20日 廿日市町所蔵史料から宮島関係を調べ、69点を写真にして収集する。6月20日まで
- 4月22日 松岡久人氏、広島大学助手秋山伸隆氏来室。
- 4月23日 後藤陽一氏、定宗一宏氏来室。
調査の進め方について打合わせる。松島綏氏、畠山一成氏来室。
- 4月25日 大竹市郷土史講座「大竹と宮島の歴史」について話す。
- 4月26日 県立図書館において上田家文書マイクロフィルムから、関係資料22点を複写収集する。
- 5月2日 廿日市高校是光吉基氏来室。
島内の石造物調査について打合わせる。
- 5月4日 広島市企画調整局小林正典氏、鈴尾修司氏、菊楽肇氏来室。
- 5月9日 宮島町旧室重家取り壊しにつき、内部を実測し、図面化と写真を撮影する。
- 5月13日 広島城郷土館で展示品の調査をする。
毛利元就、隆元、輝元より棚守あての書状、神社の鉄灯籠、厳島図(屏風・額)など。
- 5月18日 県博準備室資料調査委員会に出席する。
- 5月20日 佐竹文化財保護研究協議会に参加する、宮島。
- 5月30日 中央公民館活動の郷土学習講座「古典に親しむ会」を開始する。毎月1回、『厳島道芝記』の原典講読をはじめめる。
- 6月2～3日 著作権講習会に参加、研修をうける。
- 6月3日 五日市町シルクロード学級来島案内。
- 6月6日 「古典に親しむ会」第2回。
- 6月11日 町史編さん小委員会を宮島で開く。
- 6月17日 広島市南千田西町婦人学級17名来島案内。
広島工大・佐藤重夫教授来島、旧室重家の調査をする。
- 6月21日 町教委同和研修。
- 6月22～24日 千代田町史編さん室にて、宮島関係史料を調べる。千代田町井上就吉氏所蔵史料から21点を写真にて収集する。
歴史民俗資料館等連絡協議会、千代田町。
- 7月4日 「古典に親しむ会」第3回。
- 7月6日 聖崎燈籠銘文の調査。
- 7月7日 中之町井戸調査。

- 7月8日 島内石造物の実測調査、是光吉基氏。
- 7月12日 神奈川大学短期大学・網野善彦教授来島。後藤陽一氏、松岡久人氏、岩村益文氏、廿日市町史一色征忠氏、小西三喜男氏とともに、町史に対する考え方について話し合う。
- 7月16日 町内諸家史料の写真撮影。
- 7月18～19日 宮島小学校、中学校の宮島踊練習。
- 7月20日 岩村家文書「宿帳」の整理を文化女子短大学生に依頼する。
- 7月25日 紅葉谷川など災害の件につき、堤正信氏、広島女子大学生とともに県土木建築部砂防課を訪ねる。
- 7月27日 市立図書館にて関係文献を借用し、複写収集する。
- 7月30日 資料館セミナー
- 8月1日 「古典に親しむ会」第4回。
定宗一宏氏来室。
- 8月2日 県中学校社会科研修会現地案内。
- 8月3日 頼祺一氏来室。
- 8月4日 幸町宮忠家改築につき、内部の写真をとる。同家より明治期史料65点の寄託を受ける。
- 8月5～6日 西日本文系学芸員研究会、神戸。
- 8月18日 江田島青年の家研修生来島案内。
- 8月20～21日 広島近世史研究会合宿研修、宮島。
- 8月22日 東京大学・本多昭一氏、GA誌取材のため来島。
- 8月27日 大竹市和田世弘氏所蔵史料から宮島関係史料を写真にして収集する。11月28日まで。
和田家には、幕末明治頃の貴重な史料が大量に保存されており、大鳥居寄進帖、幕末砲台関係などの史料がある。
- 8月28日 河岡武春氏、藤井昭氏と民俗編の打合せを広島にておこなう。
- 9月5日 「古典に親しむ会」第5回
帝塚山短大須山助教授、宮島歌舞伎の調査のため来室。
- 9月13日 昭和20年9月17日枕崎台風災害地の実地踏査をする。
- 9月26日 廿日市町で脇田雅彦氏と民家調査について打合わせ。
- 9月29～30日 歴史民俗資料館等連絡協議会、瀬戸田町。

以上、前号に引に続き昭和57年4月から昭和58年9月までの編さん室のあゆみをふり返ってみました。

史料の所在確認、収集作業についてみれば、島内史料はもちろん島外史料にもかなり宮島に関する記録がみられる。現在、佐伯郡沿岸部を中心にすすめてきたが、今後は、山間部の史料について

も調査をすすめていかなければならないだろう。たとえば、山県郡豊平町においても「宮島御銀」という語が史料に発見されたり、同郡千代田町では、宮島の石風呂に入湯した際の記録が残されている。

また県内に限らず、愛媛県松山市の砥部町にある神社の境内社には、宮島社と書かれた砥部焼のさいせん箱があり、三津浜には大きな巖島神社があり、その土台には亀甲型に刻まれた切石がある。現在、宮島の巖島神社との直接的なつながりはないにせよ、宮島を考える材料になる。

このように島内では納まりきらない拡がりをもつため、県内は勿論、全国的な規模で各地の資料館、研究者の方々との連絡をより一層密にして、種々の情報を教えていただきたいと思う。

このほかの動きとして、従来から宮島町は町史の編さんを社会教育のなかでいかに位置付けるかについて努力しているが、公民館の郷土学習講座を担当している。自分たちの町がどのようにしてでき、今どうなっているのか、歴史の綾を紐とく手がかりとして、昭和58年5月から毎月1回、「古典に親しむ会」を開いている。58年度は、手はじめとして元禄10年に書かれ、15年に版行された「巖島道芝記」を読みすすめている。このような本が江戸時代に出版されていること自体、宮島の特徴を物語るものであるが、それを丹念に読むことによって、当時の時代感覚と今のそれとのちがいを身近に感ずることができるのではなかろうか。

このほかかなりの回数に及ぶ来島案内なども社会教育普及活動の一環として行なっている。

2. 委員会など

○昭和57年6月26日、町史の構成、調査方法など具体的な案を作成するため、広島にて小委員会を開く。参加者は、後藤陽一氏、松岡久人氏、藤原健蔵氏、藤井昭氏、頼祺一氏、野坂元良氏、町側として、有本幹夫町長、亀井寛教育長、山田敏行教育次長、が出席した。

有本町長は就任後初めての会合であるので、町の町史編さんに対する取り組み姿勢と期待をつぎのように述べた。

他の市町村にはない宮島の特質を生かし、世界に目を向けた平和都市広島シンボルのシンボルとしてふさわしい画期的な町史をつくりあげてもらいたい。そのためには、期間、構成、予算についての十分な措置はする考えである。

後藤委員長がこれまでの経過を述べ、本会合では、町史の全体構想作成のためには、多方面からの検討が望まれ率直な意見を出して欲しい。またこのような機会を数多く持ってもらいたいと述べた。

この委員会に提出された構成案はつぎのとおりである。

○本論（通史編） 2～3巻

1. 古代・中世

2. 近世・近代

(3. 近現代)

○特論編

1. 自然と人

日本三景という由縁の解明。

・人とのかわりのなかで自然をとらえる。

2. 信仰（宗教）と民俗

3. 建築と美術工芸

○資料編

1. 文芸と芸能

連歌・和歌などの奉納歌。

2. 地誌と紀行

「御幸記」・「道芝記」・「図会」・「厳島誌」・旅日記など従来文芸として扱われていたもの。

3. 編年文書

4. 諸記録抄、その他

「房頭記」・墨書された落書など。

5. 近・現代資料

諸統計書類など。

○各巻の規模は、読み易さを考えて600～700頁程度。特論編、資料編の巻数は、調査の状況に応じて増巻をする。

資料編は、単なる資料の復刻にとどまらず、詳細かつ親切な説明を加える。

この構成案に対して各委員からの質疑応答がおこなわれた。

まず松岡久人氏が、史料収集の理念について、直接町民の生活に関係のない史料が、例えば「反古裏経」は学問的な価値があり、県史には所収されていないが、切り捨てられないようにしなければならない。この機会に宮島に残っているものは全て記録し、町史に所収しておく必要があると述べられた。また構成案の本論と特論編の規定について、考えてみてはと提案された。この点について討議の結果、小委員会ではつぎのような共通認識にいたった。

○特論編は、現在の宮島を宮島たらしめる注目すべきものを扱う。その中には必ずしも歴史的展開として位置づける必要のないものもあるであろう。

○本論は、歴史的展開として位置づけられるものとする。

○資料編は入念な解説を付け、判りやすいものとする。

○調査の基本方針は、記録として調査しておく必要のあるものは全て資料として収集しておく。

「自然と人」に関して藤原健蔵氏は、日本三景・商業と観光など他地域とのつながりで考える必要がある。商業と観光などは近代の通史編でも重要なものとなる。特別名勝としての守られ方を「自然と人」で地理学的手法で解明していきたい。そのためには観光客とその動態、商業圏などについての一斉調査が必要であると述べられた。

藤井昭氏は、民俗編に関して、厳島信仰をすべて民俗でとらえられるとは思えない。近世までは文献を民俗学的方法で解明し、広域的な存在として厳島をとらえる。そのため信仰については宗

教史的アプローチも考えなければならぬと述べられた。

頼祺一氏は、宮島の芸能（舞楽、能、歌舞伎）はどの部門で扱うのか、芸文に入れて「文芸と芸能」編にしてはどうかと述べられた。

野坂元良氏は、神社などに所蔵しているものについては、この際に徹底的な調査を加えて欲しいとその意気込みを述べられた。

これらの討議の末、それぞれの巻の内容、構成、規模、調査方法などの概要については、各分担当担当者を中心に、心あたりの人を加え、必要があれば部会形式の会合をもち、具体的な構想をもちより、編さん小委員会にて検討することが申し合わされた。

○昭和58年6月11日、町史編さん小委員会が宮島町で開かれた。参加者は、後藤陽一氏、松岡久人氏、藤原健蔵氏、藤井昭氏、岡田貞治郎氏、教育長であった。

本小委員会では、町史の全体構成について小委員会のメンバーの具体的な検討を集めて討議に入った。

本論、資料編については特別の意見はなかったが、特論編については各部門毎につきのような内容で討議が行なわれた。

<建築編>

昭和57年7月30日、小松茂美氏との話し合いの結果、「建築と美術工芸」は、「建築」と「美術工芸」の二編とすることになった。

本の体裁について、形式を決めてもらいたい。例えばB5判5号活字1段組み程度ではどうか。

地御前神社（外宮）の本来の社殿配置、同社の規模などについて究明してみたい。

<信仰と民俗>

民俗を考える基盤として信仰があり、その信仰は芸能、文芸など種々の結びつきがある。

民俗と信仰は、それぞれ分けて考える必要がある。

民俗では、昭和42年の緊急調査報告の段階でやり残した内容も含めて調査項目を決定したい。例えば石垣の組み方のちがいに、町の形成を究明できる。またみやげ物の材料、作り手、販売経路などの問題。民俗で落とせないのは、①個人のサイクル（人の一生）、②島のサイクル（年中行事）、③衣食住であり、このほかに伝説なども取り上げる必要がある。

信仰では、厳島神社の神祇史的究明、大元神社、七浦エビス神等々神々の関わり方、各仏教寺院等の島への定着の時期、神社地域社会との関わり方―神仏習合―明治排仏毀釈等々、厳島神社の分布、旧6月17日一管絃祭の分布、宮島講の拡がり等、信仰の民俗的調査の必要が論じられた。そのため、旧仏教に詳しい人で、宗派にとらわれない究明が必要であり、松岡先生に内容、人選などお願いする。

<人と自然>

地理的分野と資料編との関係について。

<地誌と紀行>

当時、宮島がどういうふうに見られていたか。景観、自然観とのつながりが考えられる。

外国人の見た宮島という視点で外国人による記録、詩などを網羅的に収集する。

<近・現代資料>

人口動態、観光の問題、事業所統計、港湾統計など。

これらの進行状況との調整により、年度計画を立て地理調査を実施したい。さらに、気候、水質、沢ごとの土砂量、動植物の生態学的究明も必要であるが、これらは他の分野（通史・民俗など）とも深くつながってくる。

例えば、島内井戸の水質調査、分布状況を究明することにより、町の形成過程が把握できる。

以上のような討議が実施されたが、このほかに古絵図、地図などの復刻についても話し合われた。そして、分後各部門毎の専門委員会を適宜開くようにしたい。なお各部門ごとの専門委員会、調査の経費については予算化されていることが確認された。

本編・資料編については今後の検討を待ちたいが、基本的には全体の構成について小委員会として了承された。

町史の構成案

○本編（通史）

- ①古代・中世
- ②近世・近代上
- ③近代下・現代

○特論編

- ①自然と人 ②信仰と民俗 ③建築 ④美術工芸

○体裁 B5判 5号活字 1段組にそろえる。

○資料編

- ①文芸と芸能 ②地誌と紀行 ③編年文書 ④諸記録抄 ⑤近・現代資料

○各巻とも600～700頁とし、増巻することもある。

編集後記

「宮島の歴史と民俗 第2号」ができました。宮島町歴史民俗資料館と町史編さん室の活動を通して、宮島を紹介するものです。

今回は、是光吉基先生の玉稿をいただきました。先生のご意見として、宮島は海を中だちとして他地域との人・物の交流によってなりたっているのです、その歴史・民俗などの調査には、非常な労力が必要となるとおっしゃっていました。考古学という遺物を通して人のいとなみを研究しておられる先生ならではの励ましの言葉とうけとりました。先生には引続いて島内の石造物の調査を進めてもらっています。

残されているものを、考古・歴史・民俗・美術……とあらゆる目を通して見ながら、宮島を舞台として生活した人々の知恵に学びたいと考えています。そして、そのものと知恵を永遠にわれわれの財産としていくことが今求められているのではないのでしょうか。

また、町史編さん委員会委員の方のお勤め先・役職に若干の移動がありましたので、記しておきます。(順不同、敬称略)

松岡久人 鈴ヶ峯女子大学教授

定宗一宏 広島文化女子短期大学教授

藤井 昭 広島女学院大学助教授

歴史民俗資料館は、昭和59年で開館10周年を迎えます。この10年の間に、各地で資料館や博物館・美術館が開設され、人々に親しみやすくなってきました。宮島町でも、町民の方々をはじめ数多くの人々の協力で微力ながら活動を進めてきました。また、宮島町博物館協会の発会、宮島水族館の大改造、町史編さん事業の開始と、“地方の時代” “文化の時代” と呼ばれるような時の経過がありました。これらも、現代の宮島・観光を大きな産業としてなり立っている町の1つの象徴かも知れません。

この機会に真摯に歴史民俗資料館の活動を顧ると、資料収集・調査研究・展示普及とそれぞれの成果と課題もはっきりしてきました。そして、施設・設備の点でも不十分なところも気づきました。これらの成果を伸し、課題を克服していかなければなりません。次号は、そんな意味も含めて、資料館の開館10年を1つの一里塚とするような「宮島の歴史と民俗」にしたいと考えています。